多摩川沿川地域におけるオープンスペースと建築景観の実態に関する調査研究

—特に建築物による眺望遮蔽の現状と河川の景観資源価値への影響や住民意識について—

２００８年

進士　五十八
東京農業大学　地域環境科学部造園科学科　教授

共同研究者：栗原裕也（東京農業大学大学院　造園学専攻）・青木いずみ、麻生恵、栗田和弥（東京農業大学　地域環境科学部造園科学科）・神藤正人（東京農業大学　短期大学部環境緑地学科）

研究の概要

多摩川沿いに建つ建築物が多摩川の景観にどのような影響を与えているかについて、①多摩川沿いに実際にどの程度の高さの建築物が分布しているか現状を調査して実態を把握し、②多摩川の景観について市民がどのようなイメージを持っているかアンケート調査によって明らかにした。

また、③江戸名所図会等の絵図から多摩川の名所景観の場所とその視点場、眺望方向を特定し、その景観の特性を把握し、名所景観の構図と構成要素について分析した。さらに④名所景観が現在どうなっているか、実際に視点場に立って構図と構成要素の現状を調査した。

調査の結果、多摩川沿いの建築物の高さ調査では、上流より下流の方が平均的に高い、幹線道路沿いに局所的に高くなっている、用途地域では工業系地域での高層化がみられる、といった土地利用による建築物の高さの傾向の他に、川に近い範囲（堤防から 500m以内）の平均階数が高い場合その対岸は高層化されないという傾向が推察され、多摩川の眺望景観の有無が建築物の高層化に影響している可能性が示唆された。

多摩川の景観イメージアンケート調査では、多摩川らしい景観のプラスの評価指標は「自然豊か」、「開放感がある」、「山並みや街並みのスカイラインの統一」であり、逆にマイナスの評価指標は「雑然としている」であることが明らかとなった。

多摩川を描いた名所絵等の構図分析では、41 点の名所絵等が把握され、うち 36 点について描かれた場所と視点場・眺望方向が特定された。この 36 点から対岸景、流軸景、俯瞰景の３つの構図について分析したところ、対岸景は此岸、川、対岸の平坦地、遠景の山々、アイストップ、流軸景は画面中心に蛇行する多摩川、両岸の緑が交互に張り出し、川上の橋や船、アイストップ、俯瞰景では視点場が必ず描かれ、多摩川両岸の平坦地の広がり、蛇行する多摩川、遠景の山々、が構成要素であることがわかった。さらに名所景観の各視点場について現地調査を行い、対岸景では対岸に高層建築物が建ち、背景となる山並みが分断され、アイストップとなる富士・大山などが見えなくなってしまったり、俯瞰景では視点場となる場所が眺望できない状態になっていたり、視点場と多摩川との間に高層建築物が建って多摩川の眺望を遮ってしまっているなど、多摩川の名所景観が失われているところが多かった。

この結果を生かし、多摩川の景観保全のための方策づくり、そのための特に建築行為に関する配慮や規制のための法整備が行われることが考案されることが望ましい。

目　次

研究の概要 ･･ 1

１　緒言 ･･ 7

２　多摩川沿いに建つ建築物の平均階数調査 ･･････････････････････････････････････ 8
　２－１　調査範囲及び調査方法 ･･ 8
　２－２　調査結果 ･･ 11
　　（１）多摩川沿いの建築物の平均階数 ･･････････････････････････････････････ 11
　　（２）平均階数分布による多摩川沿いの建築景観の類型的把握 ･･････････････････ 14
　　（３）用途地域と平均階数分布との関係 ･･････････････････････････････････････ 17
　２－３　考察 ･･ 19

３　多摩川の景観イメージ調査 ･･ 21
　３－１　調査方法 ･･ 21
　３－２　調査結果 ･･ 28
　　（１）多摩川の景観イメージ ･･ 28
　　（２）多摩川に行く頻度による景観イメージの違い ･･････････････････････････ 31
　　（３）多摩川流域の行く場所による景観イメージの違い ･･････････････････････ 32
　３－３　考察 ･･ 33

４　名所絵等にみる多摩川の名所景観の構図分析及び現状 ･･････････････････････････ 34
　４－１　調査方法 ･･ 34
　４－２　調査結果 ･･ 35
　　（１）多摩川を描いた名所絵の把握 ･･････････････････････････････････････ 35
　　（２）名所絵に描かれた場所とその視点場及び眺望方向の特定 ･･････････････ 36
　　（３）視点場及び眺望方向による構図の違いと構成要素 ･･････････････････ 70
　　（４）名所景観の視点場及び眺望の現状 ･･････････････････････････････････ 76
　４－３　考察 ･･ 86

５　総合考察 ･･ 87

文　　献 ･･ 89

資　　料 ･･ 91

図　版　目　次

図１　調査対象地域 ･･････ 9
図２　多摩川沿いであることを意識した名称の建築物の堤防からの距離別件数 ･･････ 9
図３　調査範囲の設定概念図 ･･････ 10
図４　河口－羽村堰の両岸の平均階数（2006 年現在） ･･････ 12
図５　平均階数変化の傾向 ･･････ 13
表１　上流・中流・下流別　平均階数 ･･････ 13
図６　範囲Ａ・Ｂの平均階数の比較による景観分類の模式図 ･･････ 15
図７　景観タイプの分布 ･･････ 16
図８　多摩川沿いの用途地域の分布 ･･････ 18
図９　2006 年 11 月及び 2007 年 8 月撮影の丸子橋付近 ･･････ 20
図 10　アンケートの質問票 ･･････ 22
図 11　アンケートの際に提示した多摩川の景観の現状写真 ･･････ 26
図 12　多摩川の景観イメージ（写真提示前及び写真提示後） ･･････ 28
図 13　「全体に良い景観」と他の項目とのクロス集計（写真提示前） ･･････ 30
図 14　「全体に良い景観」と他の項目とのクロス集計（写真提示後） ･･････ 30
図 15　多摩川に行く頻度による景観イメージの違い（写真提示前及び写真提示後） ･･････ 31
図 16　多摩川流域の行く場所による景観イメージの違い（写真提示前及び写真提示後） ･･････ 32
表２　多摩川を描いた名所絵の一覧 ･･････ 35
図 17　名所絵に描かれた場所とその視点場及び眺望方向 ･･････ 37
図 18　『江戸名所図会』中「羽田弁天社」 ･･････ 39
図 19　『絵本江戸土産』中「羽田弁天社」 ･･････ 39
図 20　歌川広重「名所江戸百景　はねたのわたし弁天の社」 ･･････ 40
図 21　柳川重信「六郷渡」 ･･････ 42
図 22　英泉「英泉江戸名所　六郷渡」 ･･････ 42
図 23　柳々居辰斎「六郷渡」 ･･････ 43
図 24　歌川広重「東海道五拾三次之内　川崎」 ･･････ 43
図 25　『絵本江戸土産』中「六郷川舟渡」 ･･････ 44
図 26　『江戸名所図会』中「六郷渡場」 ･･････ 44
図 27　歌川芳年「武州六郷渡船図」 ･･････ 45
図 28　三代広重「六郷川蒸気車往返之全図」 ･･････ 45
図 29　歌川広重「東海道五十三次之内　川崎」 ･･････ 46
図 30　歌川広重「六合渡場景」 ･･････ 46
図 31　歌川広重「東海道五十三次　川崎」 ･･････ 47
図 32　五雲亭貞秀「東海道六郷渡風景」 ･･････ 47
図 33　『絵本江戸土産』中「新田明神社」 ･･････ 48
図 34　『江戸名所図会』中「最明寺」 ･･････ 49

図 35　『江戸名所図会』中「登戸渡」 51
図 36　葛飾北斎「富嶽三十六景　武州玉川」 51
図 37　『江戸名所図会』中「多摩川」「其二」 52
図 38　『絵本江戸土産』中「多摩川」 53
図 39　歌川国芳「武蔵国調布の玉川」 55
図 40　五雲亭貞秀「名所あわせ　六玉川」 55
図 41　小林清親「武蔵百景之内　玉川ぬのさらし」 56
図 42　『江戸名所図会』中「拾遺愚草」 56
図 43　『絵本江戸土産』中「調布」 57
図 44　歌川広重「諸国六玉川　武蔵調布」 57
図 45　『武蔵野話』中「向カ岡」 59
図 46　『武蔵名勝図会』中「往古甲州街道」 59
図 47　『武蔵名勝図会』中「府中宿」 60
図 48　『江戸名所図会』中「関戸天主台」 60
図 49　『武蔵名勝図会』中「日野津」 62
図 50　『武蔵名勝図会』中「玉川猟鮎」 62
図 51　歌川広重「江戸近郊八景之内　玉川秋月」 63
図 52　『武蔵野話』中「芝崎村普済寺」 65
図 53　『武蔵名勝図会』中「普済寺」 65
図 54　『江戸名勝図会』中「芝崎普済寺」 66
図 55　『武蔵野話』中「牛浜」 67
図 56　『武蔵名勝図会』中「玉川上水引入口」 68
図 57　対象景の具体例１（『絵本江戸土産』中「多摩川」） 71
図 58　対象景の具体例２（『江戸名所図会』中「拾遺愚草」） 71
図 59　流軸景の具体例１（歌川広重「はねたのわたし弁天の社」） 73
図 60　流軸景の具体例２（歌川広重「東海道五十三次之内　川崎」） 73
図 61　俯瞰景の具体例１（『江戸名所図会』中「登戸渡」） 75
図 62　俯瞰景の具体例２（『江戸名所図会』中「関戸天主台」） 75
図 63　現在の羽田弁天社周辺の眺め（2008 年 3 月撮影） 76
図 64　現在の六郷土手からの眺め（2008 年 3 月撮影） 77
図 65　現在の多摩川台公園からの眺め１（2008 年 4 月撮影） 78
図 66　現在の多摩川台公園からの眺め２（2008 年 4 月撮影） 78
図 67　現在の登戸周辺の眺め（2006 年 9 月撮影） 79
図 68　現在の調布周辺の眺め（2006 年 11 月撮影） 80
図 69　現在の天主台周辺からの眺め（2008 年 4 月撮影） 81
図 70　現在の立日橋周辺の眺め１（2008 年 4 月撮影） 82
図 71　現在の立日橋周辺の眺め２（2008 年 4 月撮影） 82
図 72　現在の普済寺からの眺め（2008 年 4 月撮影） 83

図 73　残堀川から普済寺を見上げた眺め（2008 年 4 月撮影）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
図 74　現在の多摩橋からの眺め（2008 年 4 月撮影）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
図 75　現在の羽村堰周辺の眺め（2008 年 4 月撮影）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

１　緒言

元来、河川域の景観は自然的なものである。特に人工構造物が景観構成の大半を占める都市にあって、大河川は大自然に触れあえる唯一のオープンスペースであり、地域住民にとっては精神的なよりどころともなるもので、筆者らはこれを「都市河川座標軸」[1)]と呼んでいるが、東京都では隅田川、神田川などの主要河川を「景観基本軸」として景観計画の中心に位置づけ、建築規制を行うなどして安定した河川景観の保全を図っている。住民が地域に対して方向感覚を得、また愛着を持ち安全・安心を感じるためには、河川のような景観の骨格が不変で安定していること、またそこでは眺望が得られ開放感のあるオープンスペースであることが求められる。

しかし現在、多摩川は景観基本軸に指定されていない。その景観特性や目指すべき景観像が明確でなく、景観上の規制が行われていない。

近年多摩川沿いでは高層マンションなどが建ちならび、景観が一変し、開放感、オープンスペース性や自然性を減じている。

そこで本研究では、まず①多摩川沿いにどの程度の高さの建築物が分布しているか現状を調査した。次に②現状の多摩川の景観について一般市民がどのようなイメージを持っているかアンケート調査を実施した。

以上の調査によって、多摩川の景観の現状を把握し、市民の抱く多摩川の景観イメージを把握したが、多摩川らしい景観、多摩川の景観の目標像をさらに明確にするため、③江戸名所図会等の絵を集め、その描かれた場所の視点場と眺望方向を明らかにし、多摩川の名所景観の構造を把握した。また④現在同じ視点場から多摩川がどのように見えるか現地調査を行った。

市民の抱く多摩川の景観イメージと多摩川における名所景観の構造から多摩川の景観の目標像を把握した上で、多摩川周辺の建築物によって名所景観や眺望が遮蔽されてしまうことの問題点について考察した。

２　多摩川沿いの建築物の高さ調査

２－１　調査範囲及び調査方法

調査は河口の基点から羽村堰までの片岸約 55ｋｍ、両岸合計 110ｋｍとした（図１）。

多摩川からどの程度の距離までを「多摩川沿い」と設定すべきか判断するため、“多摩川”、“リバーサイド”など多摩川沿いであることを意識した名称の建築物の分布を調べたところ、多摩川を意識した名称の建築物は堤防から 500m以上離れると激減することがわかった（図２）。

このことから、人々が多摩川沿いであると意識するのは堤防から 500m程度ではないかと想定された。

東京都の景観基本軸の指定範囲を調べてみると、隅田川景観基本軸では堤防から両岸 50m、神田川景観基本軸では堤防から 30m、玉川上水景観基本軸では川筋の中心から 100mとなっており、最も大きい指定範囲は丘陵地景観基本軸の山裾から 500mであった。これらと比較して、多摩川の景観に影響を及ぼす建築物調査の範囲は両岸 500mとれば十分と考えられる。隅田川、神田川の指定範囲の設定は、川幅に比例しており、川幅と凡そ等倍の距離を考慮すればよいのではないかと推察される。多摩川の川幅（堤防間）は最も広い河口部分で約 500mであり、堤防から両岸 500mの範囲は妥当といえよう。

次に、多摩川の治水地域分類図から多摩川の河道の最大幅を把握すると、約 500m～2000mであった。崖線上に建つ建築物の景観への影響を考えると、堤防から 500mの範囲では網羅できない場合が考えられた。

そこで、多摩川沿いという意識をもつ影響圏を堤防から 500mまでの範囲Ａとし、その倍の堤防から 1000mの範囲までを範囲Ｂとして設定することとした（図３）。

右岸の多摩川基点から堤防上を 500m間隔で川に直角に区切り、さらに両岸とも堤防に対し平行に 100m間隔で区切りメッシュ状にして、各メッシュ内の建築物の平均階数を求めた。

1/1500 住宅地図（ゼンリン、2005-2006）を用いて、地図上のひとつひとつの建築物の表示形から建蔽面積を算出し、これに階数を乗じた数値のメッシュ内の総和を建蔽面積の総和で割った数値をメッシュ内の平均階数とした。

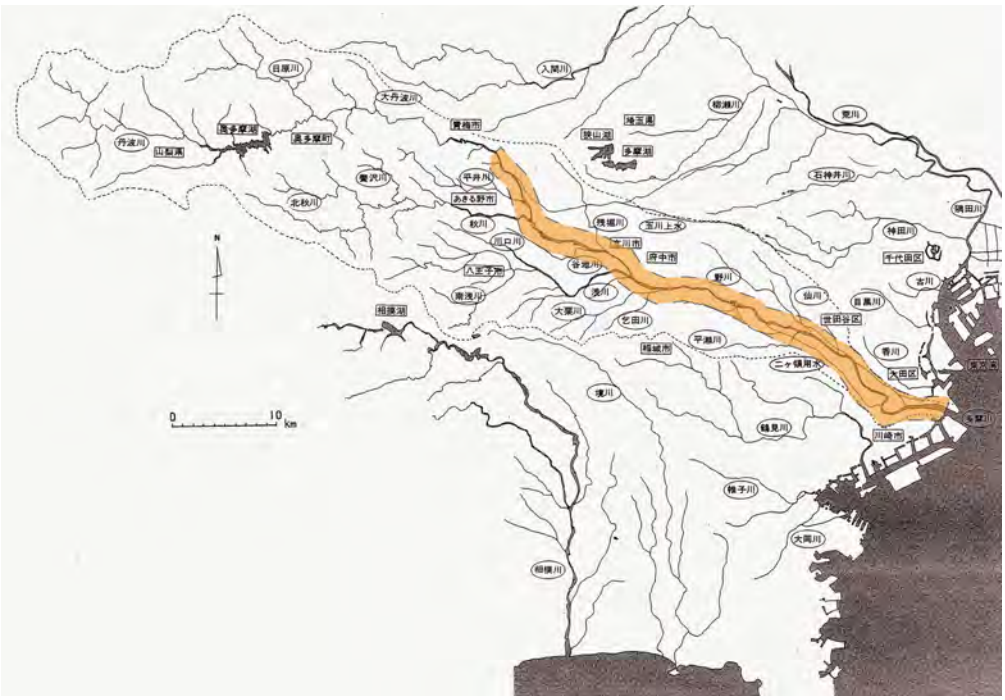


図１　調査対象地域

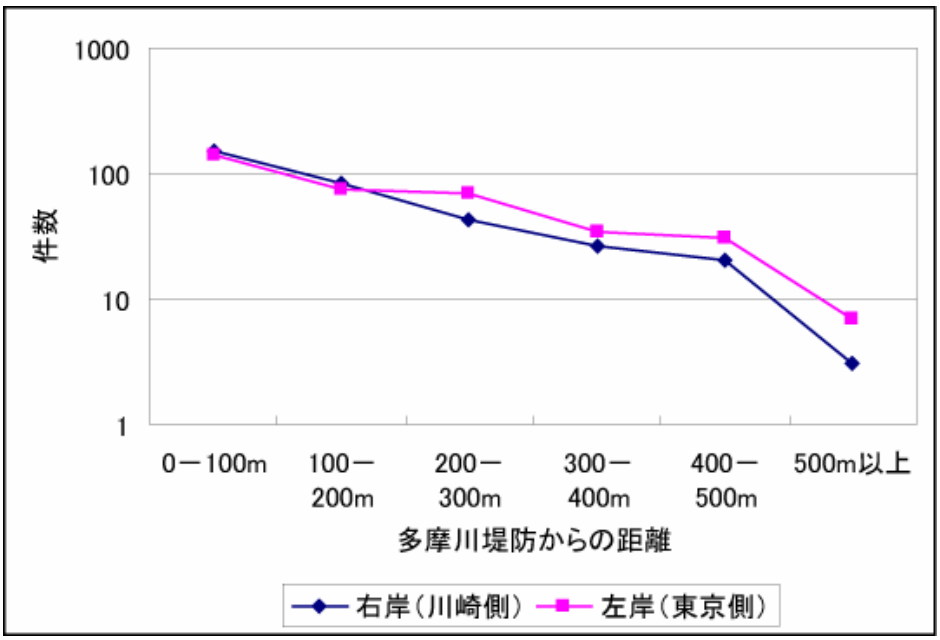


図２　多摩川沿いであることを意識した名称の建築物の堤防からの距離別件数

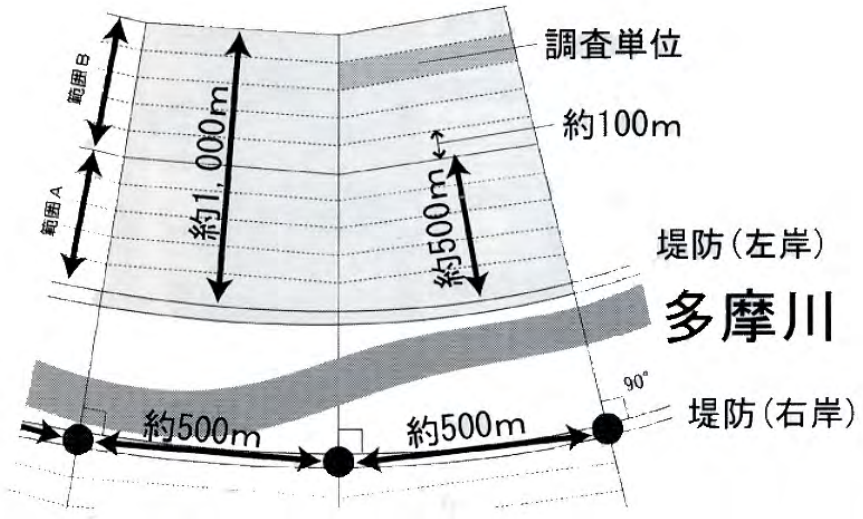


図３　調査範囲の設定概念図

２－２　調査結果

（１）多摩川沿いの建築物の平均階数

図４は、平均階数調査の結果を平均階数が高いメッシュほど濃い色で表示したものである。平均階数が最も高かった場所は左岸大田区下丸子地区で 18.8 階、次に高いのは右岸中原区下沼部地区で 14.5 階であった。どちらも近年 15 階以上の超高層マンションが多く建ち、最も高いマンションは 37 階建てである。

右岸、左岸とも、上流に比べ下流に向かうに従い平均階数が高くなっている。これは下流の方が都市化が進んでいるためである。上流から下流への平均階数の変化の傾向を、右岸、左岸、範囲Ａ及び範囲Ｂのそれぞれについて確認したところ、どの場合でも概ね上流から下流に向かって平均階数が上っていることが把握された（図５）。局所的に平均階数が高いメッシュは、幹線道路との交差部で、その平均階数は 4 階以上にもなる。

全体として左岸の方が右岸より平均階数が高く、特に左岸下流の範囲Ａが抜きん出て高い。右岸では中流が高いことが窺える。

多摩川の河口から羽村堰までを、上流・中流・下流に分け、それぞれの平均階数を算出すると、表１のようになった。なお、上流・中流・下流の分割は緑被率を指標として、是政橋より上は緑被率 30%以上で樹林地や農耕地が目立つので上流とし、丸子橋以下は緑被率 10%未満で都市化が著しいので下流とし、その中間を中流とした。

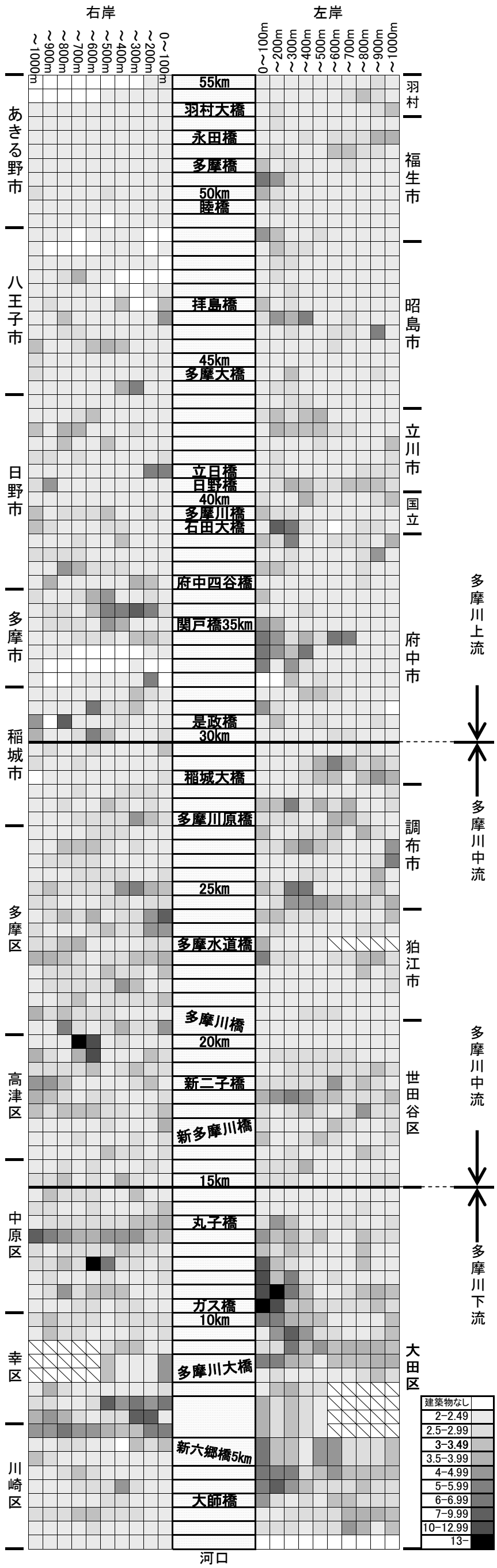


図４　河口ー羽村堰の両岸の平均階数（2006年現在）

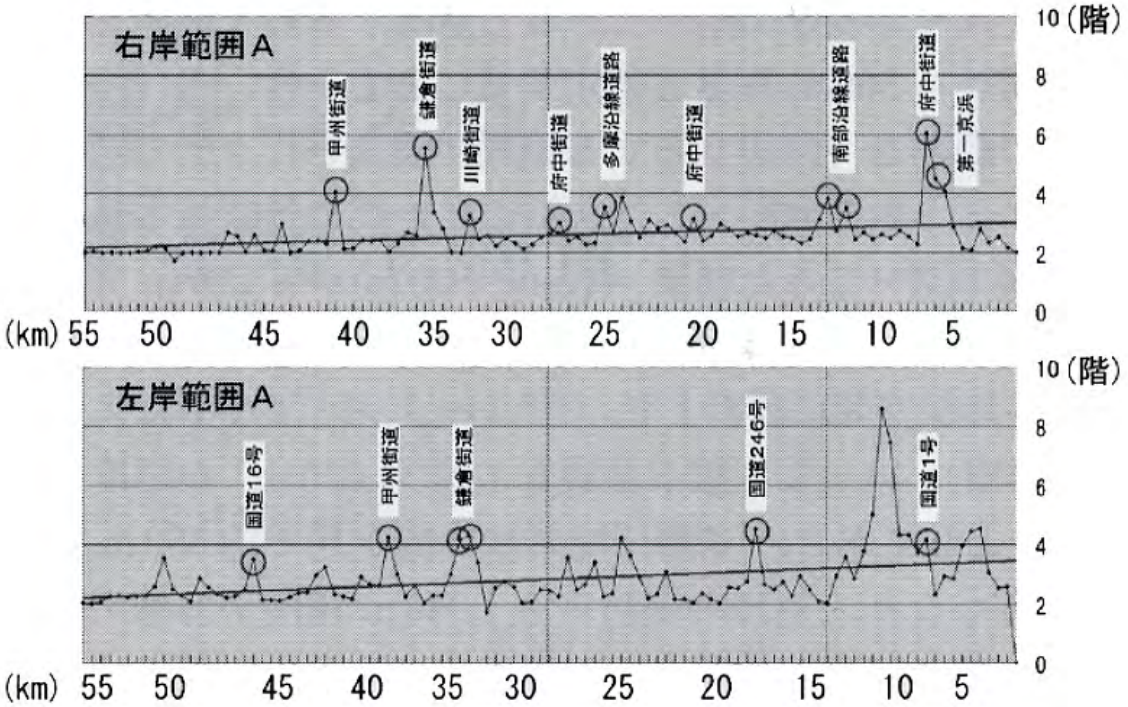


図５　平均階数変化の傾向

表１　上流・中流・下流別　平均階数（階）

右岸 （範囲Ｂ）　（範囲Ａ）		左岸 （範囲Ａ）　（範囲Ｂ）
2.64	流域全体	2.77
2.21 (2.25)　(2.18)	上流	2.43 (2.53)　(2.31)
2.86 (2.93)　(2.79)	中流	2.61 (2.65)　(2.50)
2.84 (2.58)　(2.84)	下流	3.27 (3.81)　(2.44)

（２）平均階数分布による多摩川沿いの建築景観の類型的把握

オープンスペースに面した場所に高層建築物が建つと、眺望が得られなくなり、圧迫感を与えるとともに、風景の連続性を妨げるなどの問題が考えられる。高層建築物がオープンスペースに近いほど圧迫感を増し、オープンスペース性を阻害する。従って今回の調査の場合、範囲Ｂより範囲Ａの平均階数が高い場所は景観的に影響が大きいと考えた。そこで、範囲Ａと範囲Ｂの平均階数のどちらの平均階数が高いかを比較し、景観を３つのタイプに分類した（図６）。

タイプⒶは範囲Ａ及び範囲Ｂの平均階数が同等な場合で、街並のスカイラインが揃っていると予測でき、景観的問題は少ないと考えられる。タイプⒷは範囲Ａより範囲Ｂの方が平均階数が高い場合で、建築物の高さが高い場所が多摩川から遠いため、圧迫感はタイプⒸほどにはならない。タイプⒸは範囲Ｂより範囲Ａの方が平均階数が高い場合で、高層建築物が多摩川の景観に圧迫感を与え景観的に問題があると考えられるタイプである。

上記３タイプに調査範囲を分類すると、図７のようになった。図中、景観への影響が大きいと思われるタイプⒸの場所を黒線で強調表記してある。

全体的に見て、左岸においてタイプⒸの割合が大きい。特に多摩川下流の大田区側市街地の過半がタイプⒸである。タイプⒸとなっている場所の範囲Ａの平均階数は、左岸では上流 3.47 階、中流 3.73 階、下流 4.77 階、右岸では上流 3.44 階、中流 3.64 階、下流 4.55 階となっており、表１の上流・中流・下流の平均階数と比べて 1.3～1.7 倍高い。

調査対象範囲全体で、タイプⒸの割合が約 20%を占めた。左岸下流では 50%を超えており、特に多摩川大橋から丸子橋にかけては川沿いの建築物が書割のように壁を作っている状態である。

次に両岸ともタイプⒸとなっている場所について注目した。両岸ともタイプⒸであれば、両岸とも高層建築物に囲まれた閉鎖的な景観となっている可能性があるからである。そのような場所は河口から 14ｋｍ付近の中原区丸子通と大田区田園調布（丸子橋付近）、河口から 25ｋｍ付近の多摩区布田と調布市染地（二ヶ領上河原堰付近）、河口から 35ｋｍ付近の多摩市関戸と府中市住吉町（関戸橋付近）であり、タイプⒸ全 36 ヶ所中３ヶ所のみであった。

このことから、河川沿いに高層建築物が建った場所の対岸には高層建築物が建ちにくいと考えられる。対岸に高層建築物が建っている場所は多摩川の眺望景観がすでに失われているので、建設費の高い高層を建てないのではないだろうか。つまりこのことから、多摩川の眺望価値が土地に付加価値を与え、高層建築物を誘致する要因ともなっているのではないかと推察されるのである。

Ⓐ範囲 A と範囲 B 全体で平均階数が低めで揃っている。
（差が 0.5 階以下。以下，タイプ Ⓐ と表記）
Ⓑ範囲 A の平均階数が，範囲 B の平均階数より低い。
（差が 0.5 階以上。以下，タイプ Ⓑ と表記）
Ⓒ範囲 A の平均階数が，範囲 B の平均階数より高い。
（差が 0.5 階以上。以下，タイプ Ⓒ と表記）

図６　範囲Ａ・Ｂの平均階数の比較による景観分類の模式図

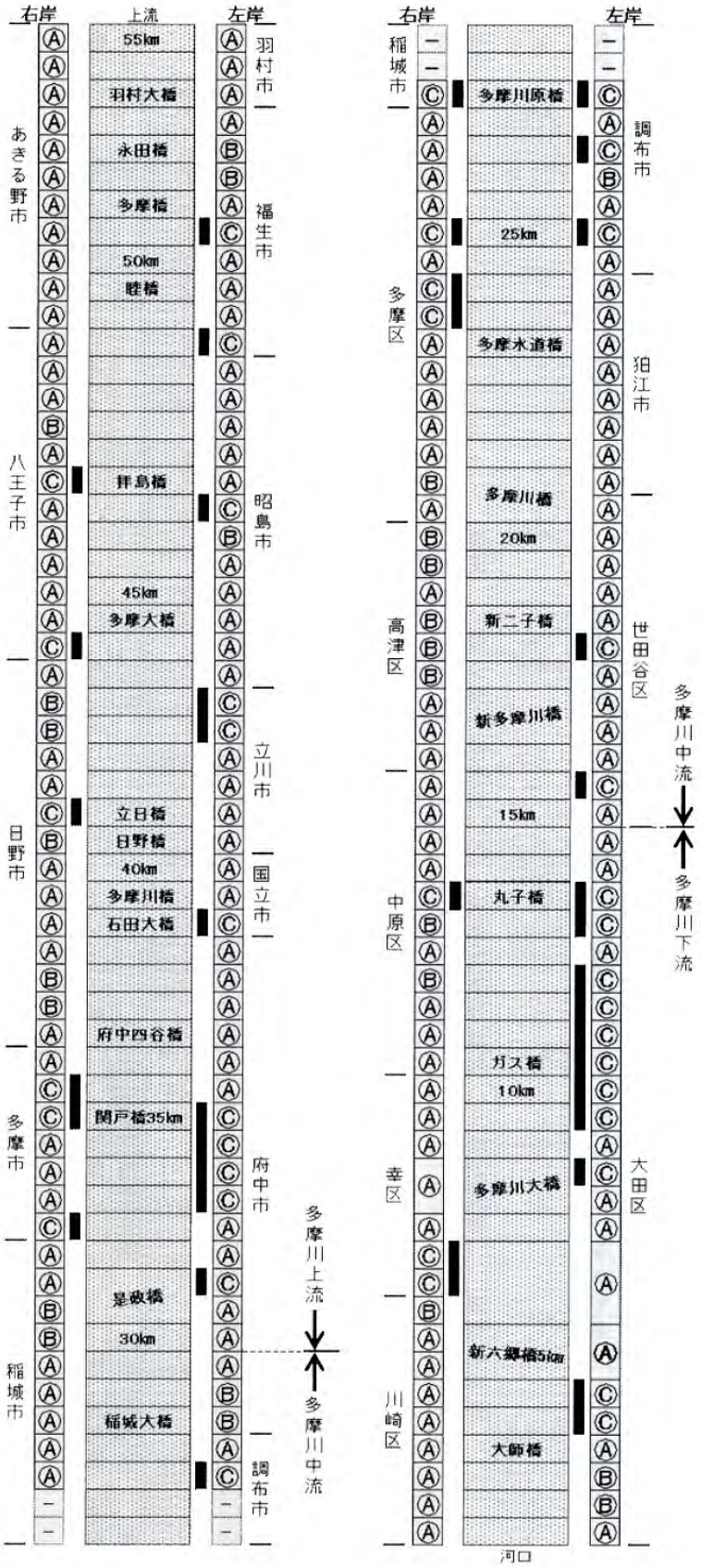

右岸
上流
左岸
55km
羽村大橋
永田橋
多摩橋
50km
睦橋
拝島橋
45km
多摩大橋
立日橋
日野橋
40km
多摩川橋
石田大橋
府中四谷橋
関戸橋35km
是政橋
30km
稲城大橋
羽村市
福生市
昭島市
立川市
国立市
府中市
調布市
あきる野市
八王子市
日野市
多摩市
稲城市
多摩川上流
多摩川中流
稲城市
多摩川原橋
25km
多摩水道橋
多摩川橋
20km
新二子橋
新多摩川橋
15km
丸子橋
ガス橋
10km
多摩川大橋
新六郷橋5km
大師橋
河口
調布市
狛江市
世田谷区
大田区
多摩区
高津区
中原区
幸区
川崎区
多摩川中流
多摩川下流

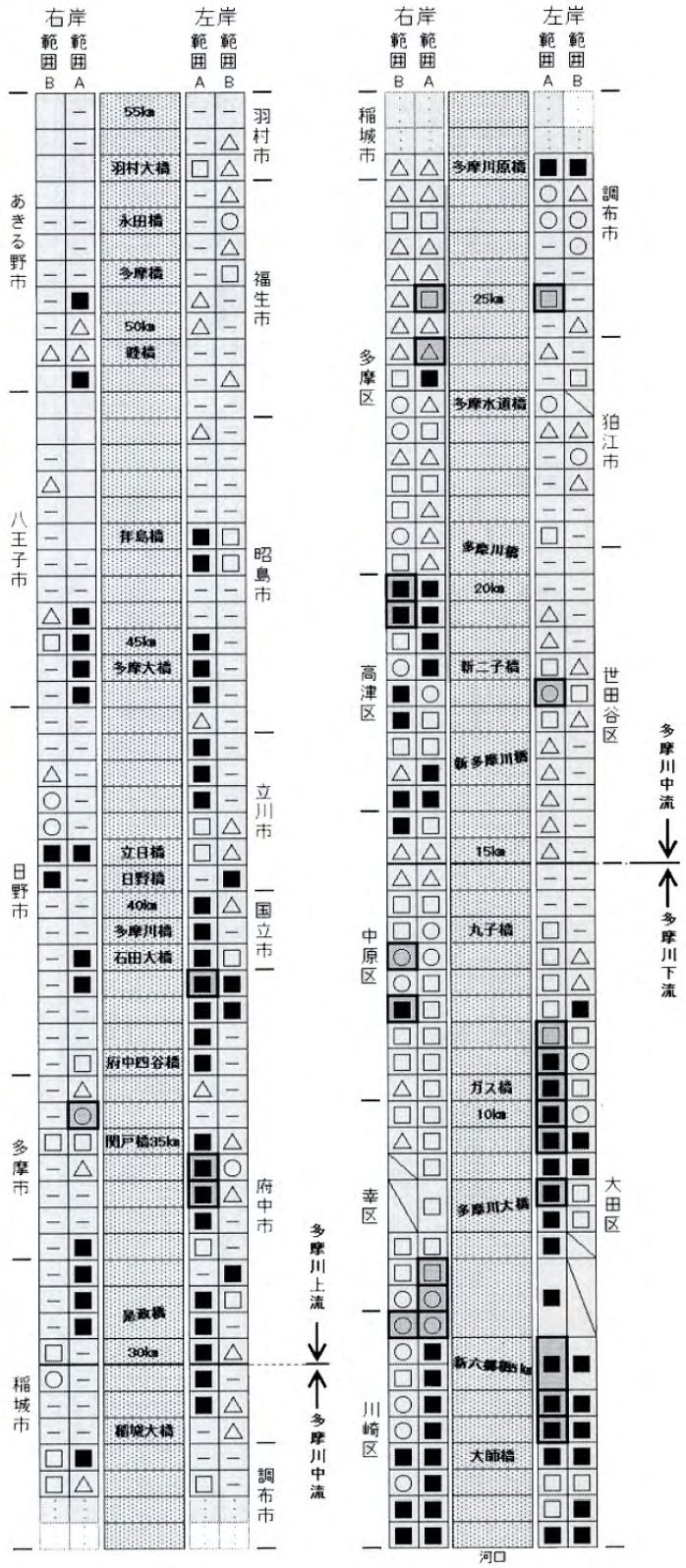
図７　景観タイプの分布

（３）用途地域と平均階数分布との関係

用途地域は建築物の規模を規定しているため、用途地域によって建築物の高さに傾向があると考えられる。そこで調査対象範囲の用途地域を調べた。住居系用途地域を低層住専・中高層住専・住居地域の３種類とし、商業系、工業系とあわせて５種類の用途地域とし、都市計画図（2004 年現在）から範囲Ａと範囲Ｂとそれぞれ卓越する用途地域によって分類した。

その結果、図７のようになり、平均階数が４階以上となる場所の約６割が工業系地域であることがわかった。多摩川沿いでは高層建築物が建ちやすい工業系用途が全域に点在している。工業系は住居系と比較して指定容積率や日影規制の規制が緩く高層建築物が建ちやすい。特に、右岸では川崎区や高津区、左岸では太田市と府中市、国立市に工業系用途が集中している。是政橋付近は府中の森に近く自然豊かな場所柄にもかかわらず、近辺に高層建築物が建ちならび、周囲と調和していない景観となっている。

また、両岸とも工業系用途地域であっても、両岸とも高いわけでなく片岸だけが高くなっている。これは前述の通り、高層建築物が建てやすい用途地域でも多摩川の眺望景観という付加価値が減じた場所では高層化されないのではないかと考えられる。これら工業系用途地域に建つ高層建築物の多くはマンションなどの住居系用途の建築物で、多摩川の自然豊かな眺望景観を付加価値としているものである。



低層「－」　中高層「△」　住居「□」　商業「○」

工業「■」　白紙地域「　」　該当なし「＼」

※太枠に囲まれた場所は平均階数４階以上

図８　多摩川沿いの用途地域の分布

２－３　考察

本調査により以下のことが明確となった。

- 多摩川河口から羽村堰までの調査対象地域を 500m×100mメッシュに区切って行った平均階数調査の結果、流域全体の建築物の平均階数は約 2.7 階で、最高平均階数は 18.8 階であった。左岸は上流 2.43 階、中流 2.61 階、下流 3.27 階、右岸は上流 2.21 階、中流 2.86 階、下流 2.84 階であった。全体として左岸の方が高く、上流より下流の方が高い傾向である。
- 幹線道路沿いは局所的に平均階数 4 階以上となっていた。また用途地域では工業系地域で建築高が高い傾向が見られ、平均階数 4 階以上の約 6 割が工業系地域であった。
- 範囲Ａの平均階数が範囲Ｂの平均階数より高い、つまり川に近い範囲の方が建築高が高くなっているタイプ◎にあたる場所は、全体で 20%あり、特に左岸下流の多摩大橋から丸子橋にかけて著しい。多摩川の眺望景観が付加価値となって建築物の高層化を誘引している可能性が示唆された。

東京都における建築物の平均階数は、1998 年の調査[2)]では住居系地域で 1.98～2.62 階、商業系地域で 2.47～4.63 階、工業系地域で 2.06～2.59 階である。多摩川沿いの平均 2.7 階は住居系地域の平均より少し高い。平均階数 4 階以上とは指定容積率 500%以上の商業地域並みの値である。現地調査の際には、2006 年度の段階ではなかったところに再度行ってみると高層建築物が出現していることがあり、多摩川沿いの高層化が如実に感じられた。

図９　2006 年 11 月及び 2007 年 8 月撮影の丸子橋付近

３　多摩川の景観イメージ調査

３－１　調査方法

多摩川沿いの建築物の高さの実態が把握され、川に近い範囲の方が平均階数が高くなっていること、高層建築物は多摩川の眺望景観という付加価値に誘引されて建設される場合が多く、眺望景観の価値を享受する反面、眺望景観を損なっている可能性があることが把握された。

多摩川の景観的価値は、①緑豊かで水があり生きられる環境と感じさせる自然性、②開放感があり広い空と遠くの山々を眺望でき、都会でのストレスを発散したり災害時の避難場所となるオープンスペース性、③変わらぬ川の流れや山々を眺められる安定したふるさと性、の３点が重要であると筆者らは考えている。多摩川沿いに高層建築物が建つことによって、多摩川景観の自然性が損なわれ、開放感のある眺望が遮られ圧迫感を与え、景観が一変してしまいふるさと性が感じられなくなってしまう。

では実際に多摩川周辺の住民や市民は、多摩川の景観についてどのようなイメージを抱いているのであろうか。また、現状の高層建築物が建ちならんだ多摩川の景観をどのように感じているのであろうか。

そこで、多摩川周辺住民及び一般市民の多摩川の景観イメージと、多摩川沿いに高層建築物が建ちならんでいる現状に対する意識を把握するため、アンケート調査を行った。

調査は 2007 年 4 月 9 日に川崎市で行われた「多摩川プランシンポジウム」の会場にて、シンポジウム参加者 136 名にアンケート用紙を配り、各自記入式で回答を得た。

アンケート内容は、多摩川の景観について「自然豊かである」、「開放感がある」、「山並みや街並みのスカイラインが統一されている」、「建築物や看板で雑然としている」、「高層ビルが建ちならび都会的」、「全体的に良い景観である」、の６つの項目について「そう思わない」（１点）、「あまりそう思わない」（２点）、「どちらでもない」（３点）、「少しそう思う」（４点）、「そう思う」（５点）の５段階評価で回答してもらうもので、まず一度アンケートを記入してもらった後、多摩川の現状について自然豊かな上流から中高層建築物が点在する中流、超高層マンションが林立する下流まで写真５枚（図８）を見せ、再度同じ内容のアンケートに記入してもらった。

多摩川の景観に関するアンケート

東京農業大学地域環境科学部造園科学科景観政策学研究室（進士五十八研究室）では、多摩川沿いの景観について調査・研究をしています。景観に興味をお持ちの皆様に多摩川の景観に対するイメージや要望を伺い、研究の資料とさせて頂きたくアンケートを企画しました。何卒ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

１．該当するものに○を付け、必要があれば（　）内に記入してください。

性別　【男・女】

年齢　【20代・30代・40代・50代・60代・70代以上】

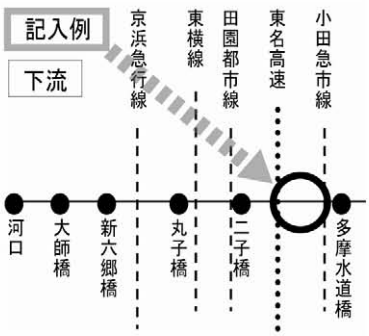
職業　【無職・学生・会社員・公務員・団体職員・教員・その他（　　）】

お住まい　【（　　）都・県（　　）区・市】

多摩川に行く頻度

【ほぼ行かない・年に１～２回程度行く・月に１～２回程度行く
週に１～２回程度行く・毎日行く)】

訪れる場所【多摩川に行かれた方は、大体どの辺りに訪れるかを下記の地図に記載してください】



・こちらにご記入下さい

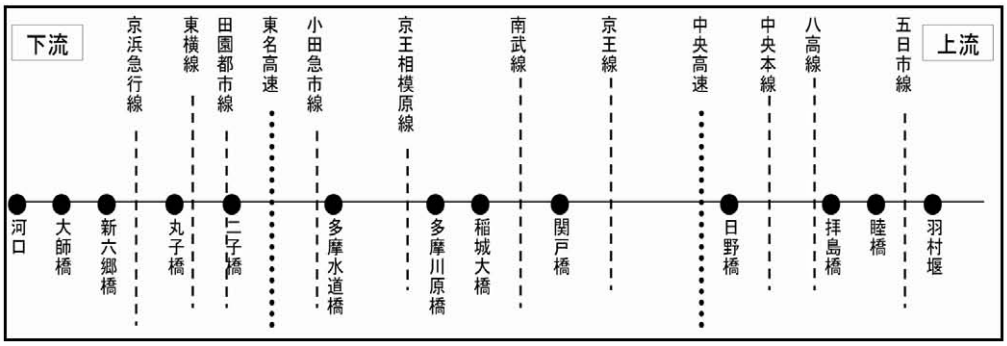


図 10－１　アンケートの質問票１

２．現在の多摩川流域全体のイメージについてお聞きします。
５段階評価であてはまるものに○を付けてください。

	そう思う	すこしそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
・自然豊かな美しい河川である	5	4	3	2	1
・広々として開放感がある	5	4	3	2	1
・対岸の山や建物の空を背景とした輪郭線が統一されている	5	4	3	2	1
・対岸の建物の色彩や看板が雑然としている	5	4	3	2	1
・高層ビルが建ち並び、都会的である	5	4	3	2	1
・多摩川の景観は全体的に見て良好である	5	4	3	2	1

３．多摩川で配慮すべきことについてお聞きします。
あなたが多摩川の在り方を考えた時、重視すべきことに順番を付けて下さい。

（　　）位　水難事故対策や安全性への配慮等　**治水**

（　　）位　水質汚濁対策や水質の保全等　**水質**

（　　）位　鳥や昆虫など、動植物や生態系への配慮等　**生物**

（　　）位　二ヶ領用水、橋、水門、堰など産業遺産への配慮等　**史跡**

（　　）位　市街地の建物の高さや富士山などへの眺望の配慮等　**景観**

図 10－２　アンケートの質問票２

ーここからは多摩川の現状の写真を見た後に記入して下さいー

４．現在の多摩川流域全体のイメージについてお聞きします。 ５段階評価であてはまるものに○を付けてください。	そう思う	すこしそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
・自然豊かな美しい河川である	5	4	3	2	1
・広々として開放感がある	5	4	3	2	1
・対岸の山や建物の空を背景とした輪郭線が統一されている	5	4	3	2	1
・対岸の建物の色彩や看板が雑然としている	5	4	3	2	1
・高層ビルが建ち並び、都会的である	5	4	3	2	1
・多摩川の景観は全体的に見て良好である	5	4	3	2	1

５．あなたは今後の多摩川流域の景観を良いものにするためにはどうすべきだと考えますか。 ５段階評価であてはまるものに○を付けてください。	そう思う	すこしそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
・多摩川沿いの緑を保全する	5	4	3	2	1
・水辺の景観を連続させることで開放的な景観にする	5	4	3	2	1
・対岸の山や建物の空を背景とした輪郭線に配慮する	5	4	3	2	1
・史跡や歴史的文化的環境を景観資産として活かすべき	5	4	3	2	1
・景観条例をつくって色彩や看板を規制すべき	5	4	3	2	1
・地域にふさわしい建築高や形にすべき	5	4	3	2	1

図 10－３　アンケートの質問票３

６．東京都の景観について意見があればお書きください。

７．水辺に高い建物が建つことについて意見があればお書きください。

ご協力有難うございました。

このアンケートに関するお問い合わせ
東京農業大学地域環境科学部造園科学科
景観政策学研究室（進士五十八研究室）
TEL(03)5477-2428
E-Mail：nodai_genron@yahoo.co.jp

図 10－４　アンケートの質問票４

図 11－１　アンケートの際に提示した多摩川の景観の現状写真１

図 11－２　アンケートの際に提示した多摩川の景観の現状写真２

図 11－３　アンケートの際に提示した多摩川の景観の現状写真３

図 11－４　アンケートの際に提示した多摩川の景観の現状写真４

図 11－５　アンケートの際に提示した多摩川の景観の現状写真５

３－２　調査結果

（１）多摩川の景観イメージ

図 12 は、写真提示前及び写真提示後の回答の項目ごとの平均値を図化したものである。

多摩川の景観イメージは「開放感がある」が最も評価が高く、約 89%の人が「そう思う」、「少しそう思う」と答えた。住民にとって多摩川の景観で最も重要なのは開放感であることを物語っている。

一方最も低い評価となったのは「山並や街並のスカイラインが統一されている」で、48%とほぼ半数の人が「あまりそう思わない」、「そう思わない」と答えている。

写真提示前にはどの項目も評価が高く、「全体に良い景観」と感じていたものが、写真提示後は評価が少し下がり、逆に「都会的」の評価が微増している。多摩川沿いに高層建築物が建ちならぶ現実を見た後では、人々は「（思っていたより）多摩川沿いは高層建築物が建ちならんでいる」と感じたのであろう。

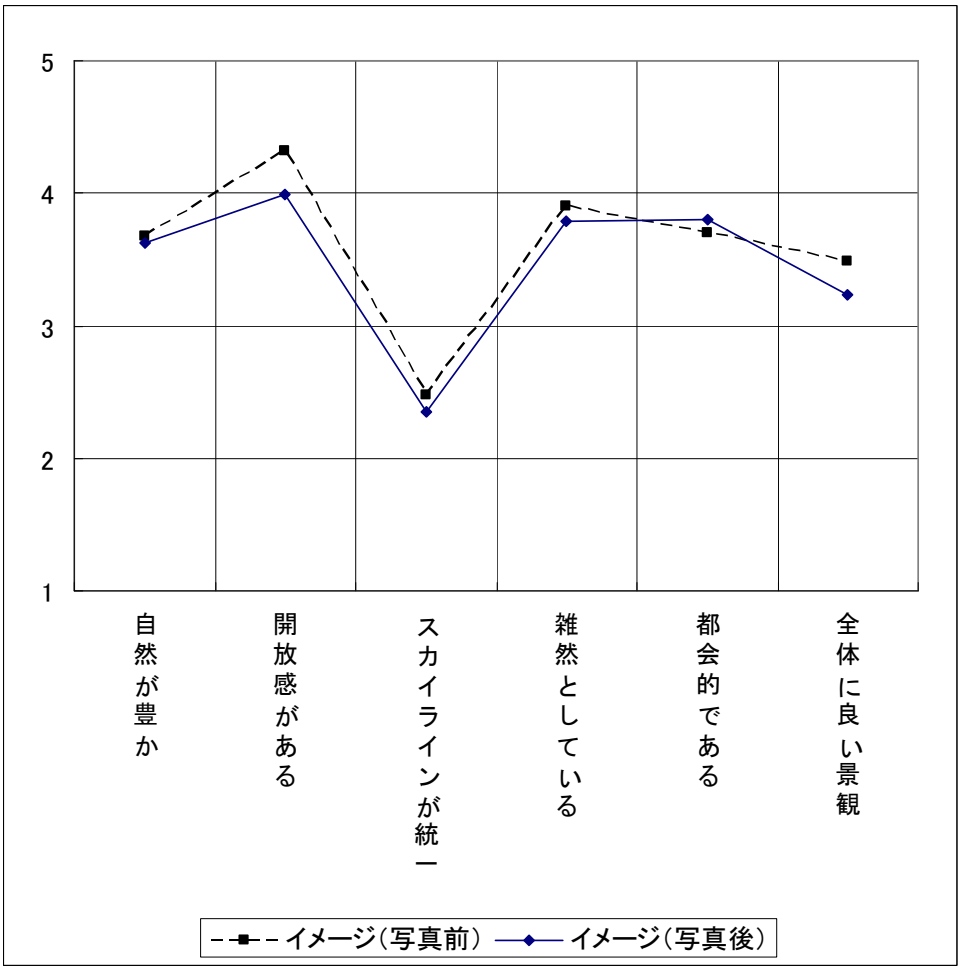


図 12　多摩川の景観イメージ（写真提示前及び写真提示後）

次に「全体に良い景観」と他の項目とのクロス集計を行った。Ｙ軸を「全体に良い景観」の評価点（１～５点）とし、Ｘ軸を各項目の平均点としてグラフ化した。

写真提示前は（図 13)、「自然が豊か」、「開放感がある」、「スカイラインが統一されている」とは相関関係にあり、「雑然としている」とは逆相関の関係にある。つまり、「自然豊か」で「開放感」があり「スカイラインが統一」されていることが「全体に良い景観」であるという評価につながり、逆に「雑然としている」ことが「全体に良い景観」とは思えないという評価につながっていると推察される。

写真提示後のクロス集計の結果では（図 14)、「スカイラインが統一されている」の相関関係が著しく、多摩川の景観評価に大きく影響を与えていることがわかる。

これらの結果から、人々は多摩川の景観イメージを特に「開放感」があると評価しており、また景観の実態よりも「自然豊か」で「開放感がある」と感じ若干高評価を与えていたが、実際の多摩川景観を写真で提示すると思っていたより高層建築物が川沿いに建ちならんでいることを実感し、「山並みや街並みのスカイラインの統一」が景観評価に大きく影響するようになった、といえよう。

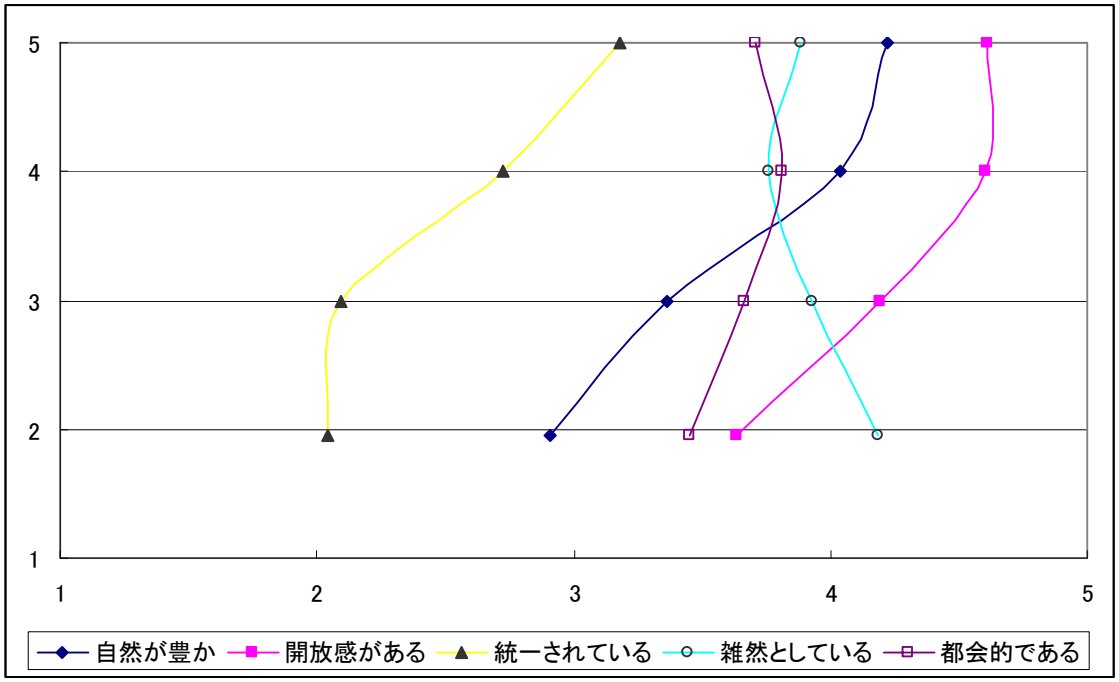


図 13　「全体に良い景観」と他の項目とのクロス集計（写真提示前）

※「全体に良い景観」の評価点をＹ軸に、他の項目の平均点をＸ軸にしている

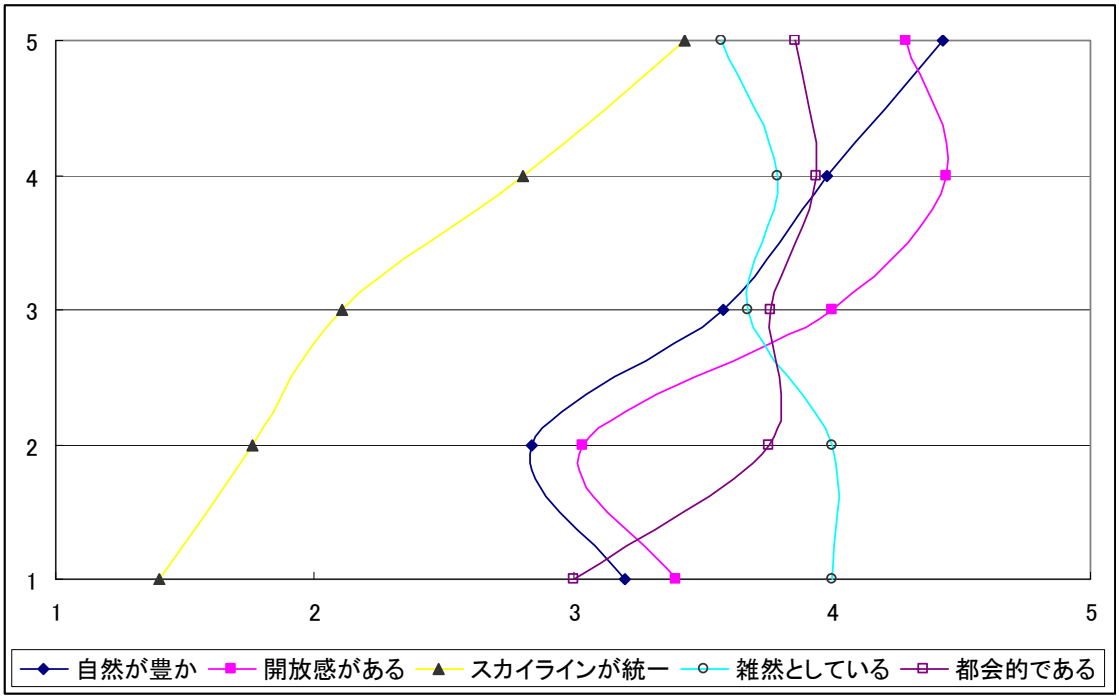


図 14　「全体に良い景観」と他の項目とのクロス集計（写真提示後）

※「全体に良い景観」の評価点をＹ軸に、他の項目の平均点をＸ軸にしている

（２）多摩川に行く頻度による景観イメージの違い

次に、多摩川に毎日行く人、週１～２回以下の人、年１～２回以下の人とで、多摩川のイメージの違いを見たところ（図 15)、多摩川に毎日行く人は多摩川の景観に関する評価が高く、「自然豊か」で「スカイラインが統一され」ていると感じていること、逆に頻度が少ない人ほど評価が低く、「スカイラインが統一され」ていなく、「雑然としている」と感じていることが明らかとなった。

写真を見せた後のアンケートでは、毎日行く人の評価は頻度の少ない人に比べて著しく下がっている。多摩川に毎日行く人は多摩川の開放感のある景観の恩恵を十分に味わっているため、イメージの中で多摩川の景観を高く評価しており、写真で見せられると思ったより建物が建ち並んで雑然としているとマイナス評価する傾向があるのではないかと推察される。

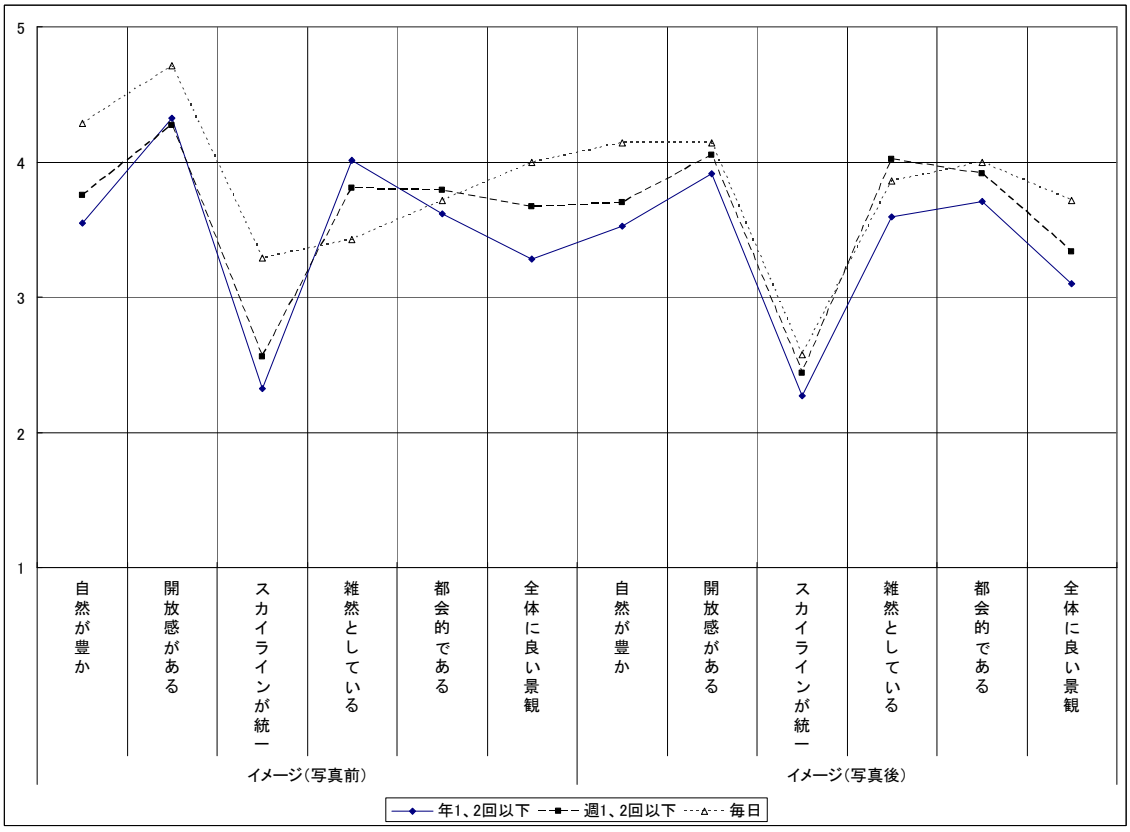


図 15　多摩川に行く頻度による景観イメージの違い（写真提示前及び写真提示後）

（３）多摩川流域の場所の違いによる多摩川景観イメージの違い

多摩川の景観イメージは、多摩川の上流・中流・下流のどこを思い浮かべるかによって異なるはずである。前述の多摩川沿いに建つ建築物の高さの実態調査でも明らかなように、上流に比較して下流は自然度が低く高層建築物が多く建っているし、右岸と左岸でもイメージは違ってくる。

そこで、多摩川のよく行く場所、行ったことのある場所に被験者に印をつけさせた。上流に印をつけた被験者、中流の被験者、下流の被験者でそれぞれ多摩川の景観イメージがどのように異なるか分析した。その結果、図 16 のようになった。

上流・中流によく行く人は「自然豊か」な印象が強く、「雑然としている」や「都会的」なイメージは少ないが、下流によく行く人は「雑然として」いて「都会的」と感じている。

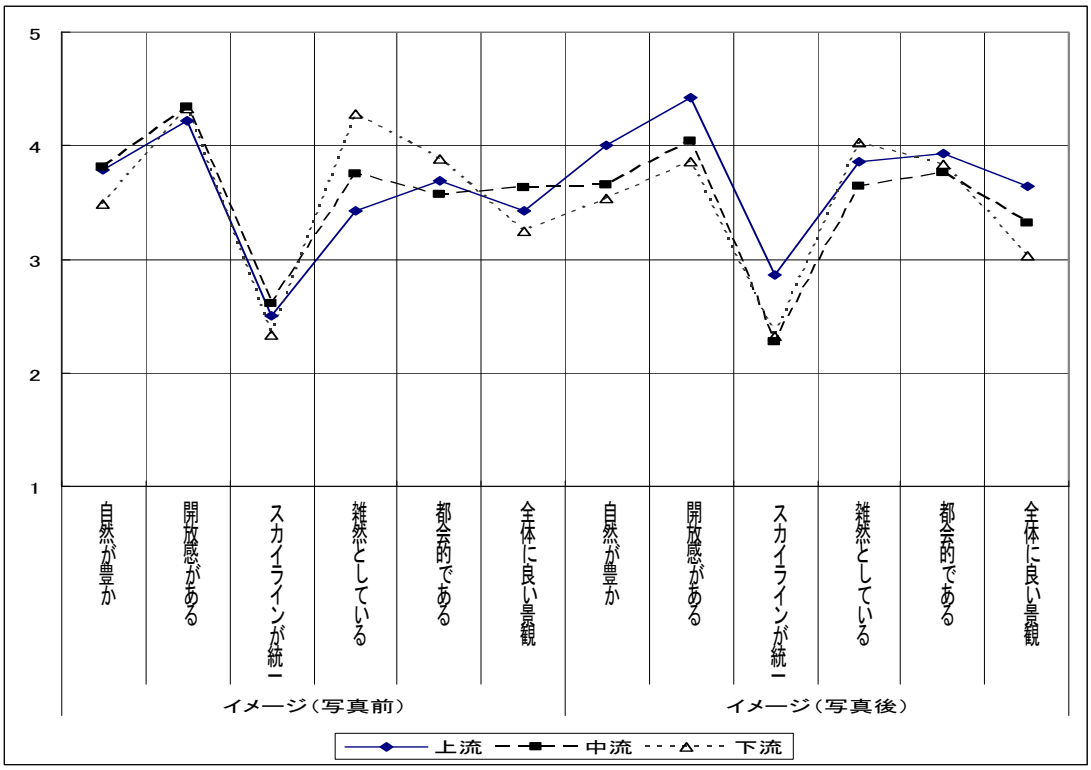


図 16　多摩川流域の場所による景観イメージの違い（写真提示前及び写真提示後）

３－３　考察

アンケート調査によって以下の点が明らかにされた。

- 人々は多摩川の景観イメージでは約 89%の人が「開放感」があるとしており、「開放感」が最も重要な評価指標となっているといえる。
- 多摩川の景観について実際よりも「自然豊か」で「開放感がある」と感じている人が多く、現実の景観の写真を見た後では「都会的」の評価が微増している。
- 多摩川に行く頻度の高い人のほうが多摩川の景観を高く評価している。また上・中流に行く人の方が「自然豊か」と高評価であり、下流によく行く人は「雑然として」いて「都会的」と感じている。
- 「全体に良い景観」とのクロス集計の結果、多摩川の景観イメージのプラスの評価指標は「自然豊か」、「開放感がある」、「山並みや街並みのスカイラインの統一」であり、逆にマイナスの評価指標は「雑然としている」であった。

近年、多摩川両岸においても高層マンションが多く建ち並ぶようになり、多摩川の開放景観を脅かしている。アンケートの自由解答欄には「〇〇に建つ建物をどうにかしてほしい」と名指しで訴えるもの、「多摩川の景観は公共財。高層マンションに住む人が独り占めは不公平」、「空と水面はセットでなければならない」という意見が寄せられた。川沿いの高層建築物は、「リバーサイド〇〇」といったネーミングでもわかるとおり、川の開放的な眺望景観を売りにして経済価値を高めている。このことは、前述の平均階数調査でも、多摩川の眺望価値が高層マンションを誘引している可能性が示唆されている。川沿いに高層マンションが壁のように建ち、その壁の背後に低層の町並みが控えているような建築高構成になっているところが、特に下流の新六郷橋から丸子橋にかけて多く、3ｋｍにわたって続いている場所もあった。このように川沿いに壁のように高層建築が建ち並んでは、多摩川らしい開放的な景観が台無しになってしまう。

今後多摩川らしい景観を保全するためには、「開放感」、「自然の豊かさ」、「山並みや町並みのスカイライン」は重要な指標となることが示唆された。

４　名所絵にみる多摩川の名所景観の構図分析及び現状

４－１　調査方法

多摩川沿いの建築物平均高さ調査より、多摩川沿いが高層化されている現状を目の当たりにした。2006 年度の調査ではなかった高層建築物を、2007 年度に再度現地に行って新に確認することがしばしばあった。このような状態では、都市の座標軸として安定したふるさと性のある景観の維持は大変難しい。

また、市民の多摩川景観に対するイメージ調査から、多摩川の景観では開放感、自然の豊かさ、山並みや街並みのスカイラインが景観評価にプラスの指標であり、逆に形のばらばらな建築物や広告看板などによる雑然とした印象はマイナスの指標であることが把握された。

ところで、多摩川の景観の保全は景観基本軸としての保全のみでなく、歴史のある景勝地としての保全も考えるべきである。

多摩川は平安の昔から和歌で詠まれるような風光明媚な景勝地で、調布の玉川と呼ばれ、六玉川のひとつとされてきた。江戸時代になると八景が詠まれ、さらに武蔵名所図会、江戸名所図会などで多摩川の風景が紹介された。文化人のみでなく一般大衆にも知られた勝地となっていたといえる。こういったいわば多摩川の名所景観は、一種のランドスケープ遺産と考えることもできるのではないだろうか。

そこで、多摩川の名所景観について把握するため、多摩川の挿絵が載っている名所図会の挿絵や浮世絵を探し、どのような風景が多摩川の名所景観と考えられるのかを調査することとした。抽出された名所絵から多摩川のどの場所が描かれているか、その視点場と眺望方向を特定し、絵の構図と構成要素について分析し、多摩川の名所景観の特性を把握し、また分析した名所景観が現在どのような状態にあるか、実際に視点場に立って景観調査を試みた。

４－２　調査結果

（１）多摩川を描いた名所絵の把握

多摩川の風景が描かれている絵について、『武蔵野話』、『江戸名所図会』などの地域案内本や絵地図、浮世絵類を検索したところ、20 種 41 点の絵が把握された（表２）。

青陵岩精『武陽玉川八景之図』は今回見つかったうちで最も古いもので、六郷付近から多摩川上流方向を眺めたものと考えられるが、喜多見晴嵐・二子帰帆・向丘秋月・都筑ヶ丘夜雨・宿河原晩鐘・登戸夕照・瀬田落雁・溝口暮雪の八景を収めるために鳥瞰図で描かれているので、実際の視点場がある景観とは考えられない。

また、長谷川雪堤『調布玉川惣画図』は多摩川を大菩薩峠から羽田弁天社、河口まで描いたもので、写実的に多摩川流域の景観を余すところなく描いているが、これも視点場の特定ができない。この２点をはずした 36 点について、描いた場所と視点場、眺望方向を分析することとした。

表２　多摩川を描いた名所絵の一覧

名所図会等の画家及び名称	制作年	描かれた場所・主題（河口←→上流）	枚数
青陵岩精『武陽玉川八景之図』[3]	寛政3（1791）	溝口暮雪・都筑ヶ丘夜雨・瀬田落雁・二子帰帆・喜多見晴嵐・登戸夕照・向丘秋月・宿河原晩鐘	1
英泉「英泉江戸名所　六郷渡」[4]	寛政年間	六郷渡	1
柳川重信『東海道五十三次』[5]	文化元（1804）	六郷渡	1
柳々居辰斎『六郷渡』[6]	文化年間	六郷渡	1
松本交山『武蔵野話』[7]	文化11（1814）	向ヶ岡/普済寺/牛浜	3
植田孟縉『武蔵名勝図会』[8]	文政3（1820）	府中古塚/府中六所宮/普済寺/羽村堰	4
歌川国芳『武蔵国調布の玉川』[9]	文政～天保	調布	1（3枚組）
五雲亭貞秀『名所あわせ六玉川』[10]	天保年間	むさしの調布	1
葛飾北斎『富嶽三十六景』[11]	天保2（1831）	武州玉川（登戸付近）	1
歌川広重『東海道五拾三次』[12]	天保4（1833）	六郷渡	1
長谷川雪旦『江戸名所図会』[13]	天保7（1836）	羽田弁天社/六郷渡場/西明寺・丸子/宿河原/関戸・天主台/登戸渡/菅生・登戸/芝崎・普済寺/日野津/鮎漁（日野）/調布	11
歌川広重『江戸近郊八景』[14]	天保9（1838）	玉川秋月（日野）	1
歌川広重『東海道五十三次』[15]	天保12（1841）	六郷渡	1
長谷川雪堤『調布玉川惣画図』[16]	弘化2（1845）	多摩川全域（大菩薩嶺から羽田弁天社まで）	1（絵巻
歌川広重『六合渡し場景』[17]	弘化4（1847）	六郷渡	1（3枚組）
歌川広重『東海道五十三次』[18]	嘉永2（1849）	六郷渡	1
歌川広重・二代広重『絵本江戸土産』[19]	嘉永3（1850）	羽田弁天社/六郷渡/新田明神/多摩川（登戸付近？）/調布	5
歌川広重『名所江戸百景』[20]	安政4（1857）	羽田弁天社	1
歌川広重『諸国六玉川』[21]	万延元（1860）	武蔵調布	1
五雲亭貞秀『東海道六郷渡風景』[22]	文久3（1863）	六郷渡	1（3枚組）
歌川芳年『武州六郷渡船図』[23]	明治元（1868）	六郷渡	1（3枚組）
三代広重『六郷川蒸気車往返之全図』[24]	明治4（1871）	六郷渡	1（3枚組）
小林清親『武蔵百景』[25]	明治17（1884）	調布	1

（２）名所絵に描かれた場所とその視点場及び眺望方向の特定

多摩川を描いた名所絵 41 点のうち、『武陽玉川八景之図』と『調布玉川惣画図』とをはずした残り 39 点について、描かれた場所ごとに整理し、その視点場と眺望方向を特定した。その結果、図 17 のようになった。

多摩川の名所景観の場所は、羽田弁天社、六郷渡、新田明神、西明寺（丸子）、登戸周辺、調布周辺、府中・関戸天主台周辺、日野渡周辺、普済寺、牛浜、羽村堰、の 11 ヶ所に整理された。六郷渡、日野渡、登戸渡などの渡し場や中原街道の通る丸子といった交通の要所、羽田天神、新田明神、西明寺、普済寺、六所宮などの著名な寺社付近が描かれることが多い。しかし牛浜や日野の秋月など、多摩川の景観そのものの価値が名所となっている場所も少なくないことがわかる。また鮎猟や多摩川の水に布をさらすなど多摩川ならではの産業行為も名所景観の資源となっている。

これらの名所絵が、現地の実際の風景にどの程度忠実なのか、場所ごとに説明する。

名所絵の視点場一覧

No.	場所	名所絵等の名称・絵のタイトル
①	羽田弁天社	江戸名所図会「羽田弁財天社」(1836) 絵本江戸土産「羽田弁財天社」(1850) 名所江戸百景「はねたのわたし弁天の社」(1857)
②	六郷渡	英泉「英泉江戸名所　六郷渡」(寛政年間) 柳々居辰斎「六郷渡」(文化年間) 歌川広重「東海道五拾三次之内　川崎」(1833) 江戸名所図会「六郷渡場」(1836) 絵本江戸土産「六郷川舟渡」(1850) 歌川芳年「武州六郷渡船図」(1868) 三代広重「六郷川蒸気車往返之全図」(1871)
③	六郷渡	歌川広重「東海道五十三次之内　川崎」(1841) 歌川広重「六合渡場景」(1847) 歌川広重「東海道五十三次　川崎」(1849)
④	六郷渡	五雲亭貞秀「東海道六郷渡風景」(1863)
⑤	新田明神	絵本江戸土産「新田明神社」(1850)
⑥	丸子	江戸名所図会「最明寺」(1836)
⑦	登戸周辺	江戸名所図会「登戸渡」(1836)
⑧	登戸周辺	葛飾北斎「冨嶽三十六景　武州玉川」(1831) 江戸名所図会「多摩川」「其二」(1837) 絵本江戸土産「多摩川」(1850)
⑨	調布周辺	江戸名所図会「拾遺愚草」(1837) 絵本江戸土産「調布や」(1851) 歌川広重「諸国六玉川」(1860)
⑩	府中周辺	武蔵野話「向ノ岡」(1814) 武蔵名所図会「府中宿」「往古甲州街道」(1820)
⑪	府中周辺	江戸名所図会「関戸天主台」(1836)
⑫	日野周辺	武蔵名所図会「日野津」(1820) 江戸名所図会「玉川晒布」(1835)
⑬	日野周辺	歌川広重「江戸近郊八景之内　玉川秋月」(1838)
⑭	普済寺	武蔵野話「芝崎村　普済寺」(1814)
⑮	普済寺	武蔵名所図会「普済寺」(1820) 江戸名所図会「芝崎　普済寺」(1836)
⑯	牛浜	武蔵野話「牛浜」(1814)
⑰	羽村堰	武蔵名所図会「玉川上水引入口」(1820)

図 17　多摩川の名所絵に描かれた場所とその視点場及び眺望方向

１）羽田弁天社

羽田弁天社は『江戸名所図会』中「羽田弁財天社」、『絵本江戸土産』中「羽田弁財天社」、歌川広重の浮世絵「名所江戸百景　はねたのわたし弁天の社」の３点が把握された（図 18、図 19、図 20）。

『江戸名所図会』と『絵本江戸土産』の描き方は非常によく似ており、多摩川から弁天社の岬を見、その向うに海が開けて船の帆が点々と見える構図である。視点場は多摩川の船上か対岸と考えられる。『名所江戸百景』も船上が視点場であり、超近景に櫓をこぐ腕が描かれ、弁天社の岬の向うに海が見える同じ構図といえる。

図 18　『江戸名所図会』中「羽田弁天社」

図 19　『絵本江戸土産』中「羽田弁天社」

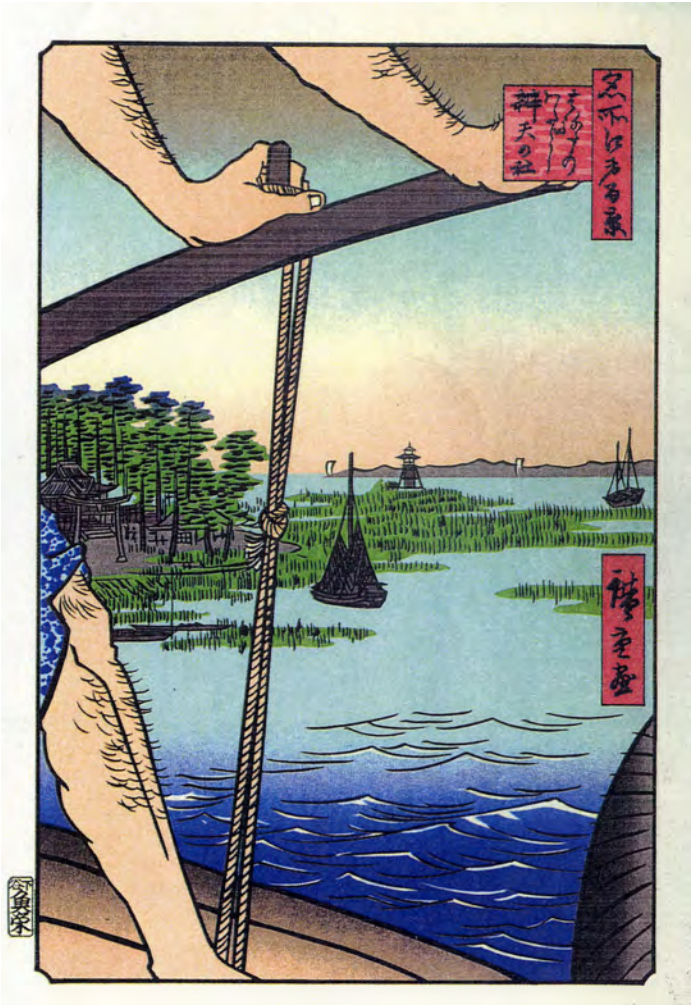


図 20　歌川広重「名所江戸百景　はねたのわたし弁天の社」

２）六郷渡

六郷渡の絵は最も多く、12 点把握された。東海道筋で多摩川を渡るポイントだったために最も多く描かれたのであろうと推測される。

うち、柳川重信の「六郷渡」（図 21）は、実際の風景というより渡しのイメージであり、視点場を設定することはできない。それ以外の 12 点を、絵の構図で分類すると３つの視点場が浮かび上がった。

ひとつは、左岸の東京側から川崎側を見る構図で、英泉「英泉江戸名所　六郷渡」（図 22）、柳々居辰斎「六郷渡」（図 23）、歌川広重「東海道五拾三次　川崎」（図 24）、同じく歌川広重『絵本江戸土産』中「六郷川船渡」（図 25）、長谷川雪旦『江戸名所図会』中「六郷渡場」（図 26）、歌川芳年「武州六郷渡船図」（図 27）、三代広重「六郷川蒸気車往返之全図」（図 28）の 7 点であった。この構図では、手前に此岸の州浜など平らな部分を描き、川を挟んで対岸に船着場と森、遠景に山を配している。富士山が遠景に描かれている場合が多い。また、川を斜めに配置して奥行きを出している。

次に、川の中ほどから上流方向を眺める流軸景の構図のものは４点であった。歌川広重「東海道五十三次之内川崎」（図 29）、同「六郷渡場景」（図 30）、同「東海道五十三次　川崎」（図 31）である。この構図では蛇行する多摩川をほぼ中央に配置し、アイストップに富士山を配している。

右岸川崎側から描いたものは、五雲亭貞秀「東海道六郷渡風景」（図 32）の１点だが、川が蛇行しているために流軸方向の構図に近いものとなっており、やはり川の流れの先に富士を配しアイストップ効果をあげている。

現地では実際に富士山を見ることはできなかったが、地図上で確認すると絵の富士山の位置はほぼ実際に見える方向と思われる。六郷付近で多摩川は大きく蛇行するため、東京側からはもちろん流軸方向にも、また川崎側から流軸方向を眺めた場合でも、富士山が見えてもおかしくはない。

図 21　柳川重信「六郷渡」

図 22　英泉「英泉江戸名所」

図 23　柳々居辰斎「六郷渡」

図 24　歌川広重「東海道五拾三次之内　川崎」

図 25　『絵本江戸土産』中「六郷川舟渡」

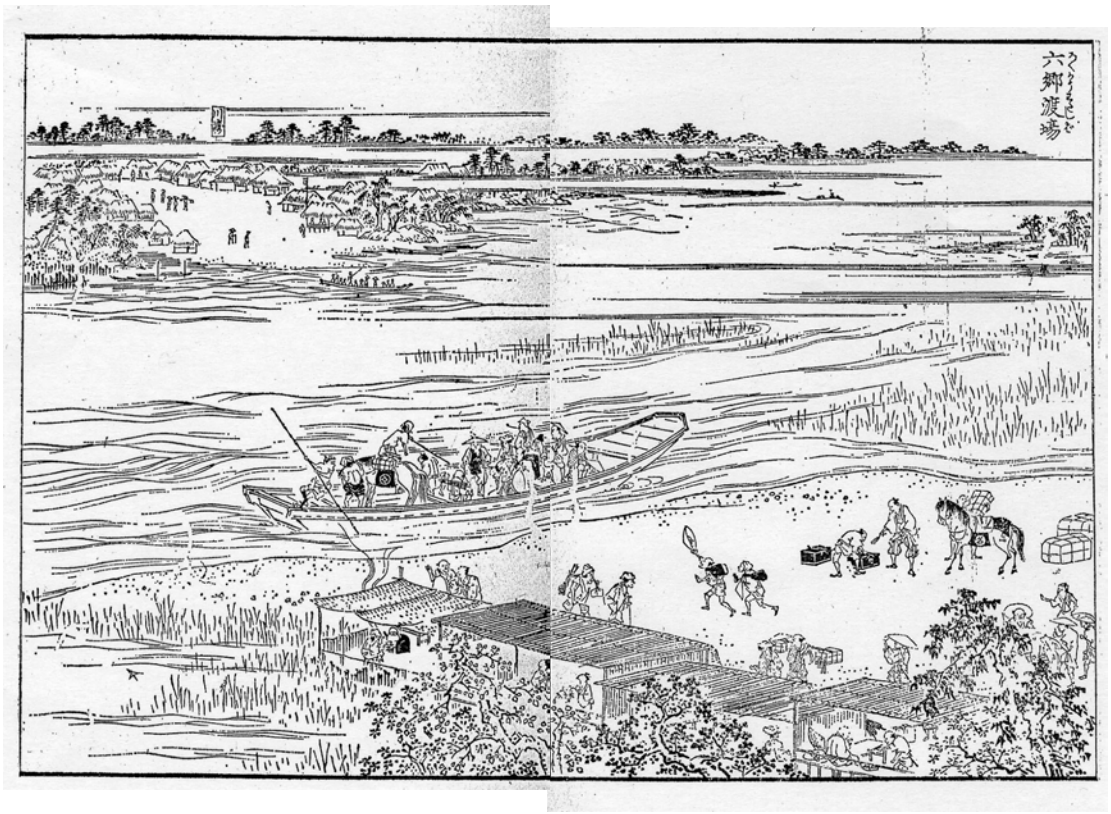


図 26　『江戸名所図会』中「六郷渡場」

図 27　歌川芳年「武州六郷渡船図」

図 28　三代広重「六郷川蒸気車往返之全図」

図 29　歌川広重「東海道五十三次之内　川崎」

図 30　歌川広重「六合渡場景」

図 31　歌川広重「東海道五十三次　川崎」

図 32　五雲亭貞秀「東海道六郷渡風景」

３）新田明神

新田明神を描いた図は『絵本江戸土産』中「新田明神社」（図 33）１点のみであった。多摩川のすぐほとりに神社の屋根が見える。昔の河道は現在より武蔵新田駅よりにあったので、新田神社は本当に川のほとりにあったのであろう。視点場は川の上か右岸と思われる。川を近景に新田明神の屋根を描き、遠景は森でぼかしている。

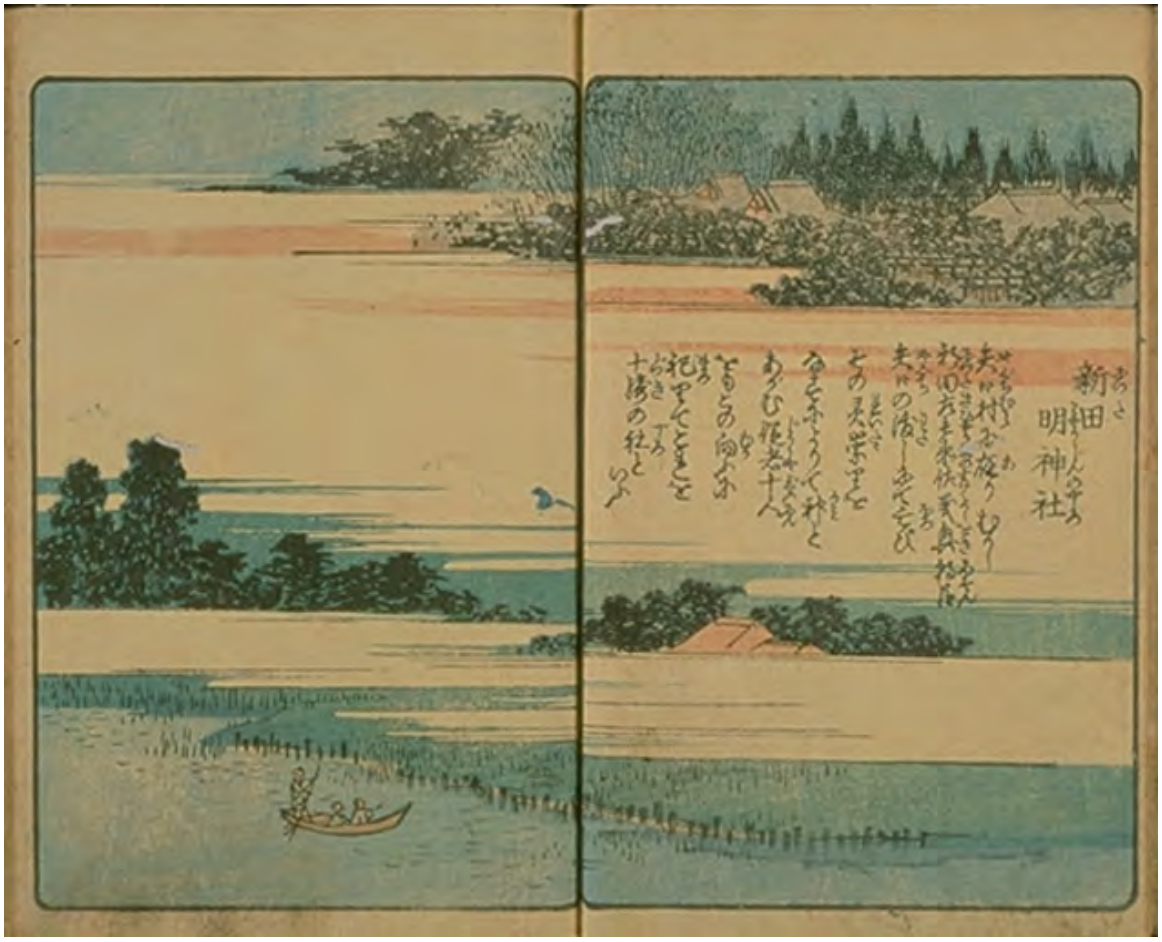


図 33　『絵本江戸土産』中「新田明神社」

４）丸子

丸子周辺の絵は『江戸名所図会』中「最明寺」（図 34）１点だけであった。

丸子橋から中原街道のまっすぐつきあたりが最明寺（現西明寺）である。視点場は現在の大田区多摩川台公園付近と考えられる。西明寺の位置関係を見せるため、鳥瞰図として描いており、実際の風景とは異なると思われる。近景に川を描いて画面中央に最明寺とその参道となる中原街道、遠景に遠近を使い分けた山を配している。

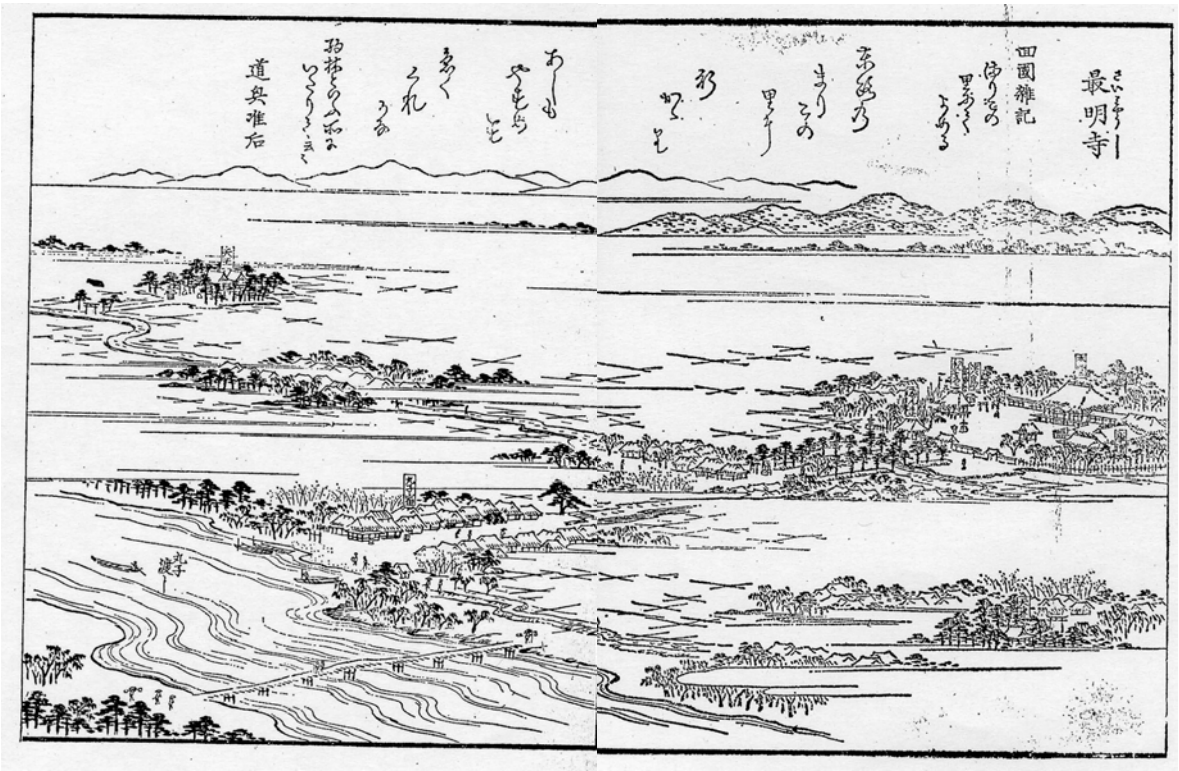


図 34　『江戸名所図会』中「最明寺」

５）登戸周辺

登戸周辺の絵は５点見出された。

構図と視点場はほぼ 2 つと考えられる。ひとつは『江戸名所図会』中「登戸渡」（図 35）で、大山道（現在の世田谷通り）の峠から多摩川を見下ろす格好である。この視点場にあたる場所は、現在の和泉多摩川駅周辺では多摩川を望む高い視点場が見当たらないが、昔の河道はもう少し北を流れていた可能性もある。狛江岩戸周辺の高台から望んだ景なのではないだろうか。

もうひとつの構図は、左岸の川縁から対岸を眺めた景で、葛飾北斎「富嶽三十六景」（図 36）、『江戸名所図会』中「多摩川」「其二」（図 37）、『絵本江戸土産』中「多摩川」（図 38）である。北斎の「富嶽三十六景」はややグラフィカルで写実性が低いと感じられるが、富士山の見える位置は実際の景観とほぼ同様である。長谷川雪旦の「多摩川」「其二」はつなげて眺めると富士山から丹沢大山の山々がパノラマ的に描かれ、圧巻である。広重の「多摩川」も川の流れを左右２消点透視図法を用いてパノラマ的に表現している。

手前に此岸、川を斜めに配し、対岸の平坦部、そして遠景に山並みや富士を描いている。

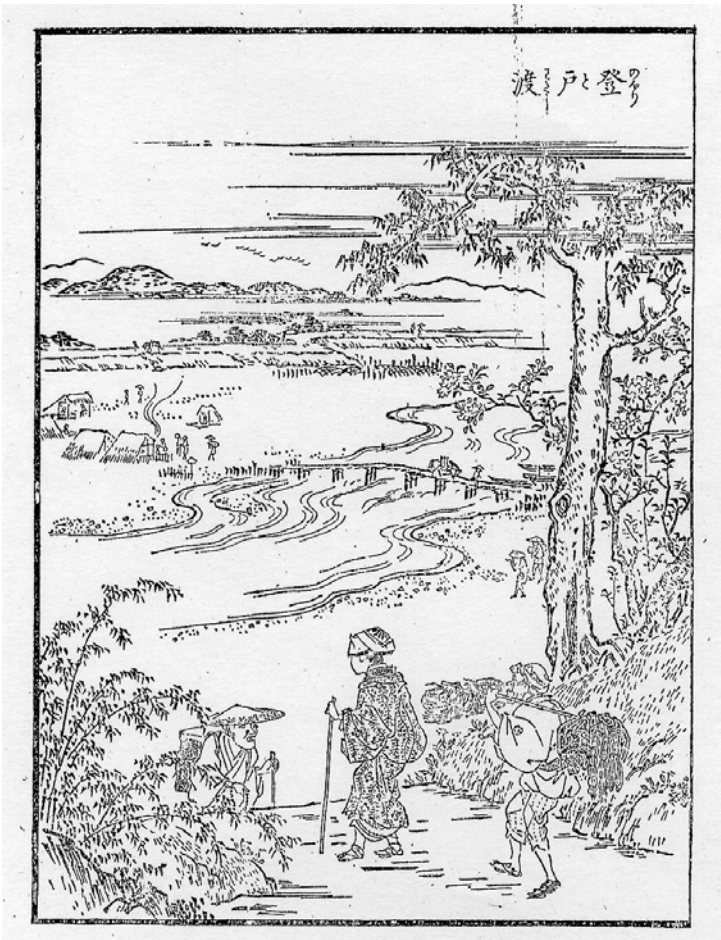


図 35　『江戸名所図会』中「登戸渡」

図 36　葛飾北斎「富嶽三十六景　武州玉川」

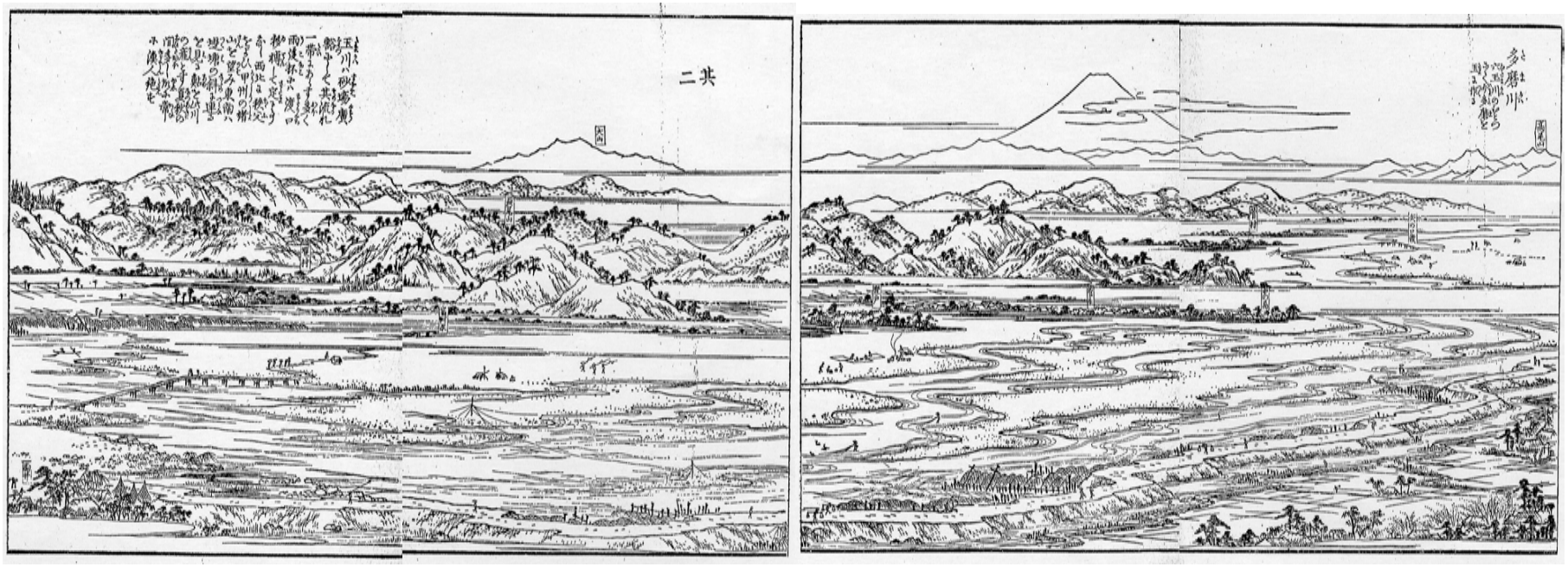


図 37　『江戸名所図会』中「多摩川」「其二」

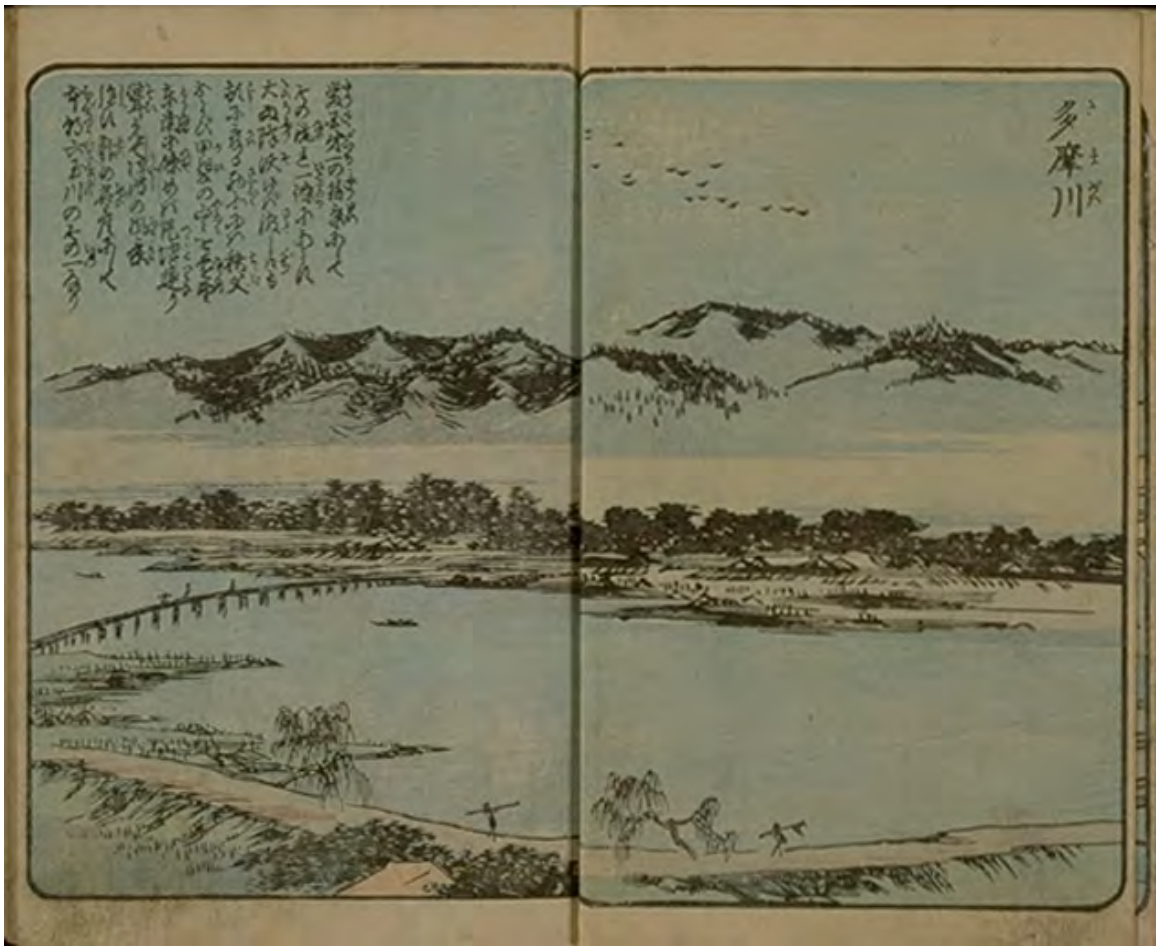


図 38　『絵本江戸土産』中「多摩川」

６）調布周辺

多摩川は和歌の題材の「六玉川」のひとつとして「調布の玉川」といわれ、布を川にさらす女性がよく描かれる。歌川国芳「武蔵国調布の玉川」（図 39）、五雲亭貞秀「名所あわせ六玉川」（図 40）、小林清親「武蔵百景之内　玉川ぬのさらし」（図 41）などは、画題は多摩川であるが女性がメインである。

視点場と眺望方向の構図がわかるもののうち、『江戸名所図会』中「拾遺愚草」（図 42）、『絵本江戸土産』中「調布」（図 43）の 2 点は左岸岸辺から対岸を見る構図で、歌川広重「諸国六玉川武蔵調布」（図 44）は流軸方向の構図となっている。

左岸から右岸を見た構図の 2 点は、川を画面中央に斜めに配し、対岸の平坦地、茂みの向うに遠景の山並み、という構図で共通している。『江戸名所図会』の方は大山と思われる山の形で、『絵本江戸土産』の方は富士山である。

流軸景の「諸国六玉川　武蔵調布」は意匠的な画面構成で、アイストップに富士山が描かれている。

図 39　歌川国芳「武蔵国調布の玉川」

図 40　五雲亭貞秀「名所あわせ六玉川」

図 41　小林清親「武蔵百景之内　玉川ぬのさらし」

図 42　『江戸名所図会』中「拾遺愚草」

図 43　『絵本江戸土産』中「調布」

図 44　歌川広重「諸国六玉川　武蔵調布」

７）府中周辺

府中・関戸周辺の絵は 4 点あった。

うち 3 点は、左岸府中側から対岸の関戸、向岡方面を眺めたもので、『武蔵野話』中「向ノ岡」（図 45）、『武蔵名勝図会』中「往古甲州街道」「府中宿」（図 46・図 47）である。視点場の特定は難しいが、段丘上の甲州街道沿いから眺めたものではないかと推測される。いずれも眼下に田畑など此岸の平坦地が広がり、その奥に多摩川が見え、さらに遠景に山を描いている。

もうひとつの視点は関戸の天主台を描いたもので、『江戸名所図会』中「関戸天主台」（図 48）である。絵では天主台が多摩川周辺の眺望を楽しめる場所であることを十分に表現している。手前に天主台とその登り口にある琴平社を描き、眼下に広がる平坦地の中を蛇行する多摩川を中央に配し、遠景に対岸の丘陵を描いている。

図 45　『武蔵野話』中「向カ岡」

図 46　『武蔵名勝図会』中「往古甲州街道」

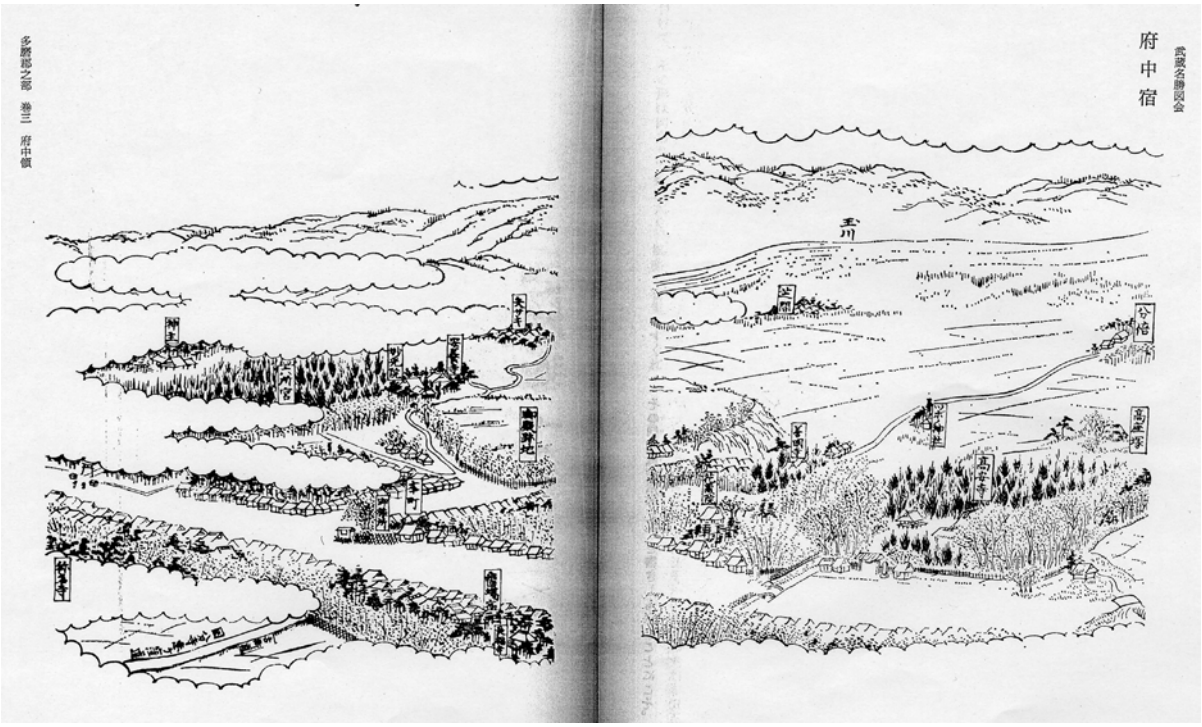


図 47　『武蔵名勝図会』中「府中宿」

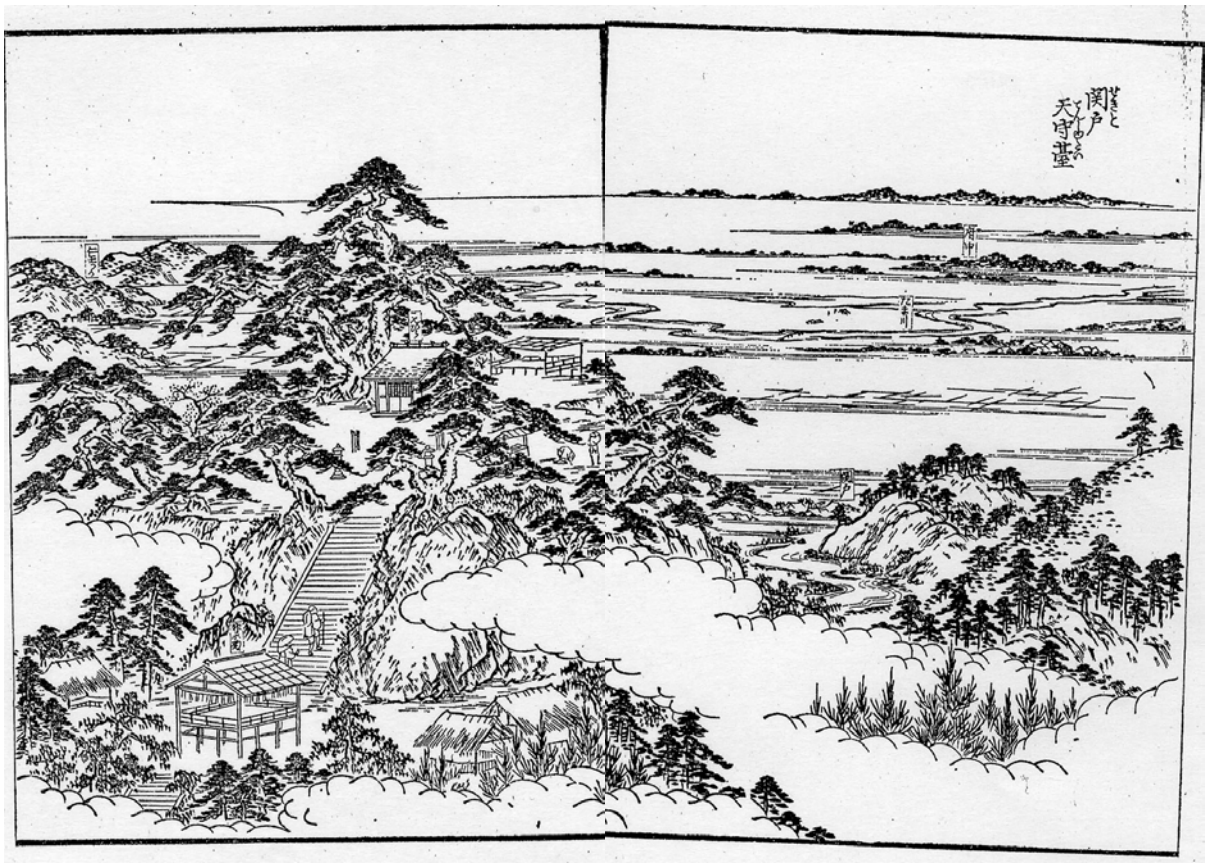


図 48　『江戸名所図会』中「天主台」

８）日野周辺

日野は、日野の渡しや鮎漁の場として描かれている他、月の名所としても有名であった。

日野周辺を描いた絵は 3 点で、『武蔵名勝図会』中「日野津」「玉川猟鮎」（図 49・図 50）の 2 点は川上から岸辺や流軸方向を眺めており、歌川広重「江戸近郊八景之内玉川秋月」（図 51）は左岸から対岸を眺める構図である。「日野津」と「玉川秋月」の遠景の山は大山であろう。

いずれの絵も、川周辺の平坦地を広く取り、山や丘陵を遠景に見せている。

図 49　『武蔵名勝図会』中「日野津」

図 50　『武蔵名勝図会』中「玉川猟鮎」

図 51　歌川広重「江戸近郊八景之内　玉川秋月」

９）普済寺

普済寺を描いた絵は 3 点で、うち『武蔵野話』中「芝崎村普済寺」（図 52）は右岸側から普済寺を眺めるもので、視点場は川崎街道沿いの高台と思われる。

『武蔵名勝図会』中「普済寺」（図 53）と、『江戸名所図会』中「芝崎村普済寺」（図 54）の 2 点は普済寺の向こう側に多摩川を描いたもので、とくに『江戸名所図会』のものは遠景に富士山を描き、普済寺が眺望にすぐれた場所であることを物語っている。現在普済寺は残堀川沿いに位置するが、残堀川は多摩川の旧河道の名残である。

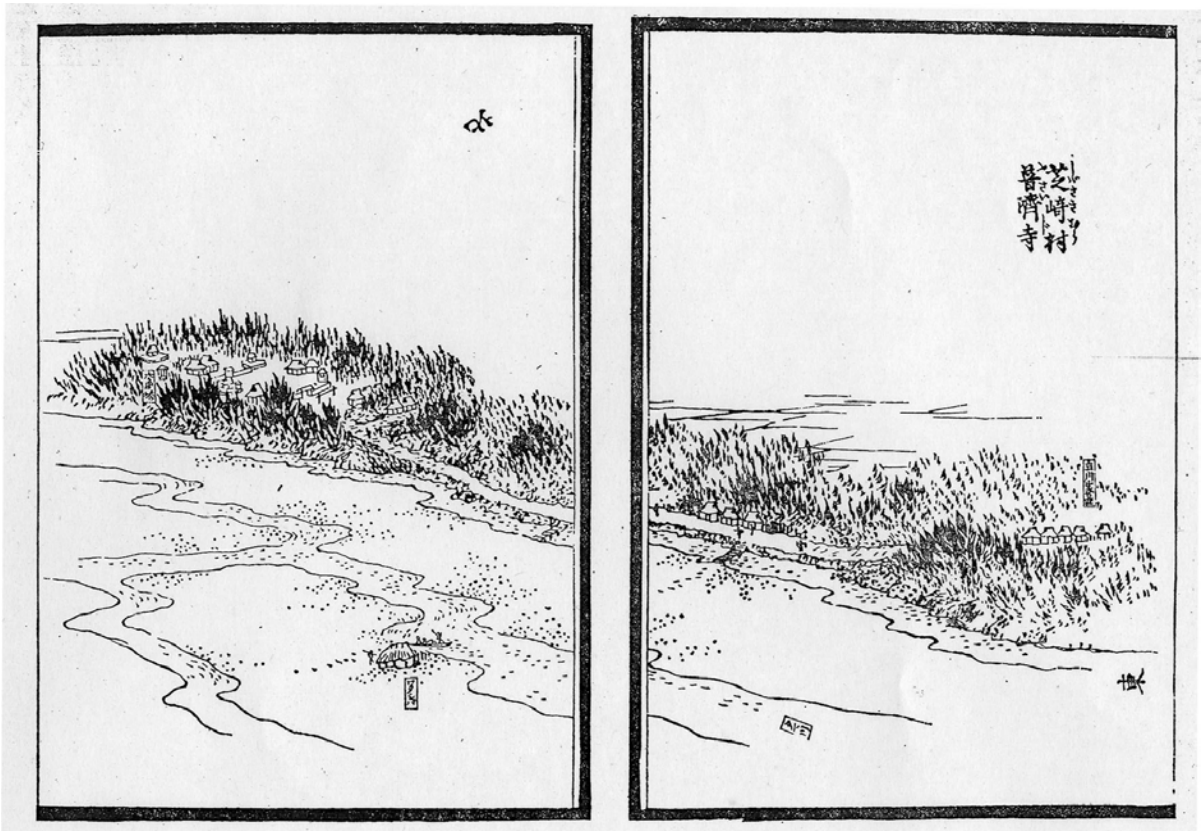


図 52　『武蔵野話』中「芝崎村普済寺」

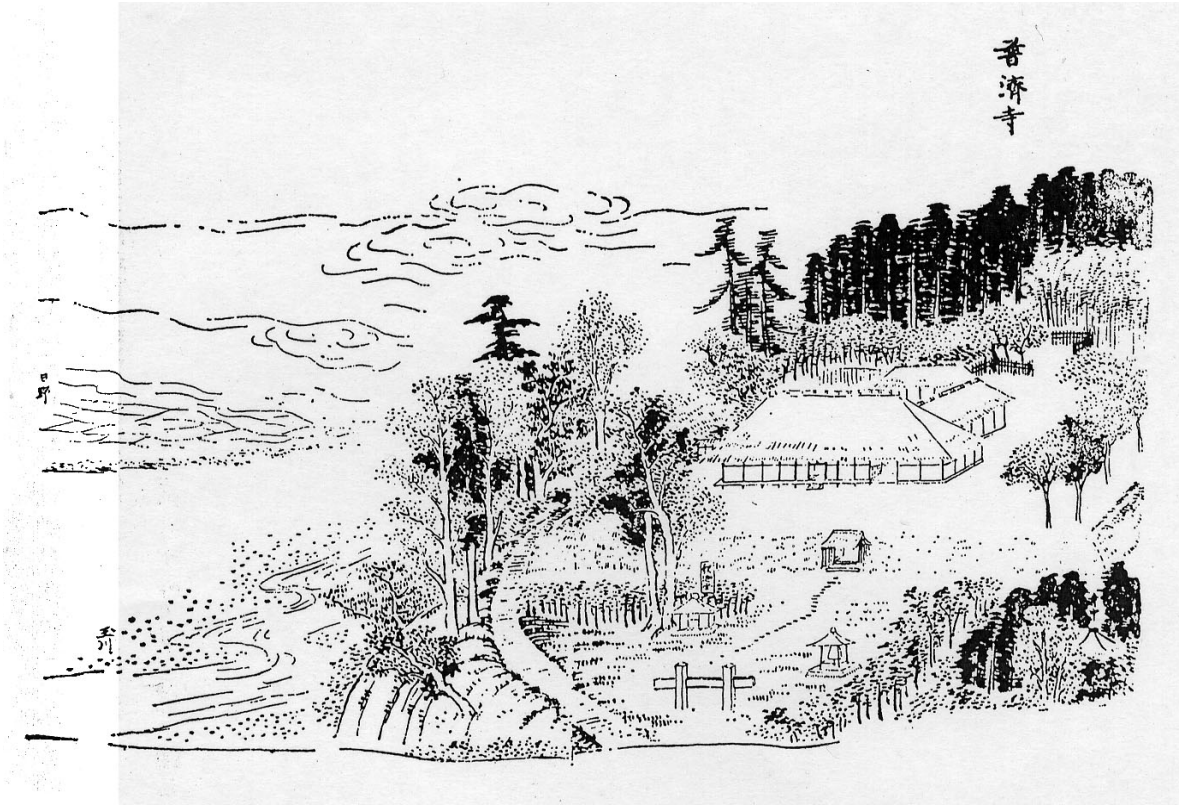


図 53　『武蔵名勝図会』中「普済寺」

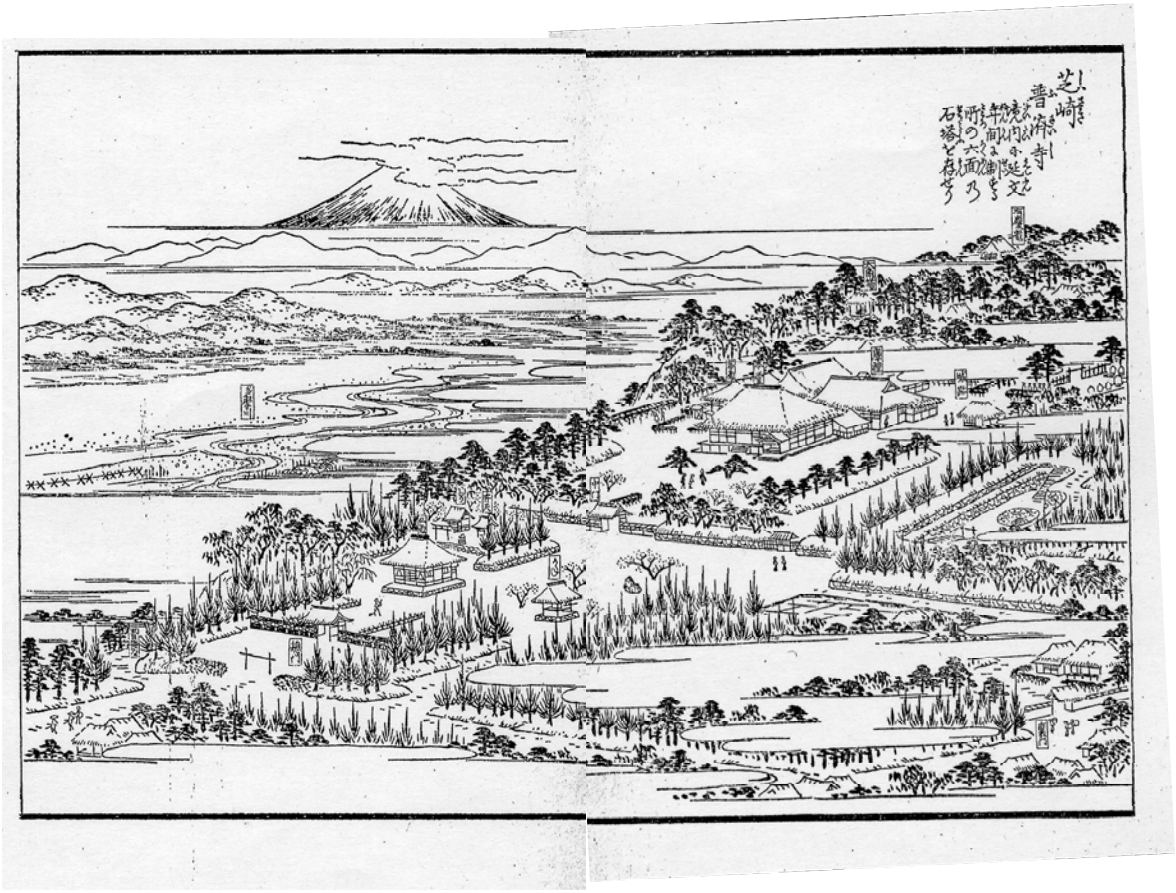


図 54　『江戸名所図会』中「芝崎普済寺」

10）牛浜

『武蔵野話』中に「牛浜」（図 55）として 1 点描かれている。広い州浜の様子が俯瞰景で表現されており、五日市街道沿いの村と田畑、遠景に山が描かれている。

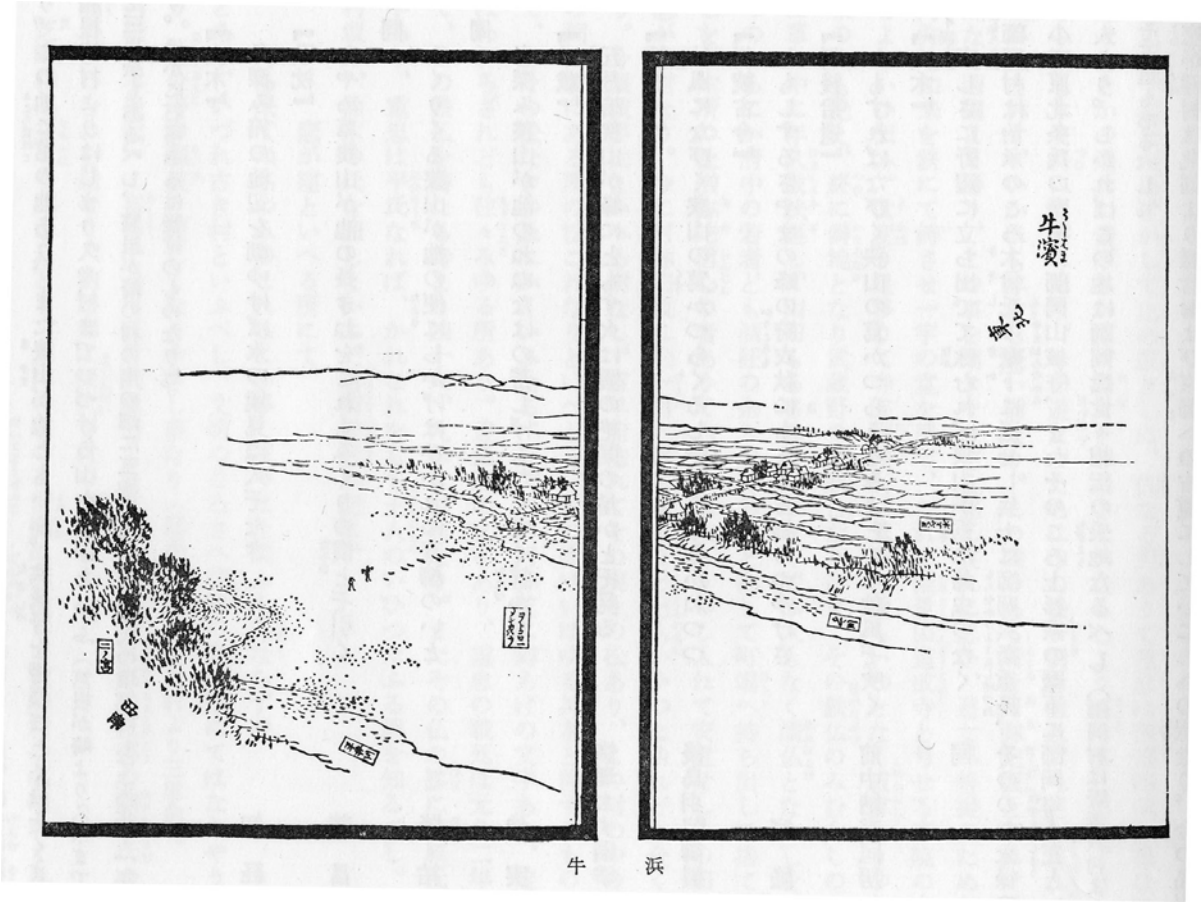


図 55　『武蔵野話』中「牛浜」

11）羽村堰周辺

『武蔵名勝図会』中に「玉川上水引入口」（図 56）として 1 点描かれている。右岸側から左岸を眺める構図で、羽村堰の多摩川の広い水面を中心に、上流方面の流れの先の正面に羽村神社のある浅間山を描いている。

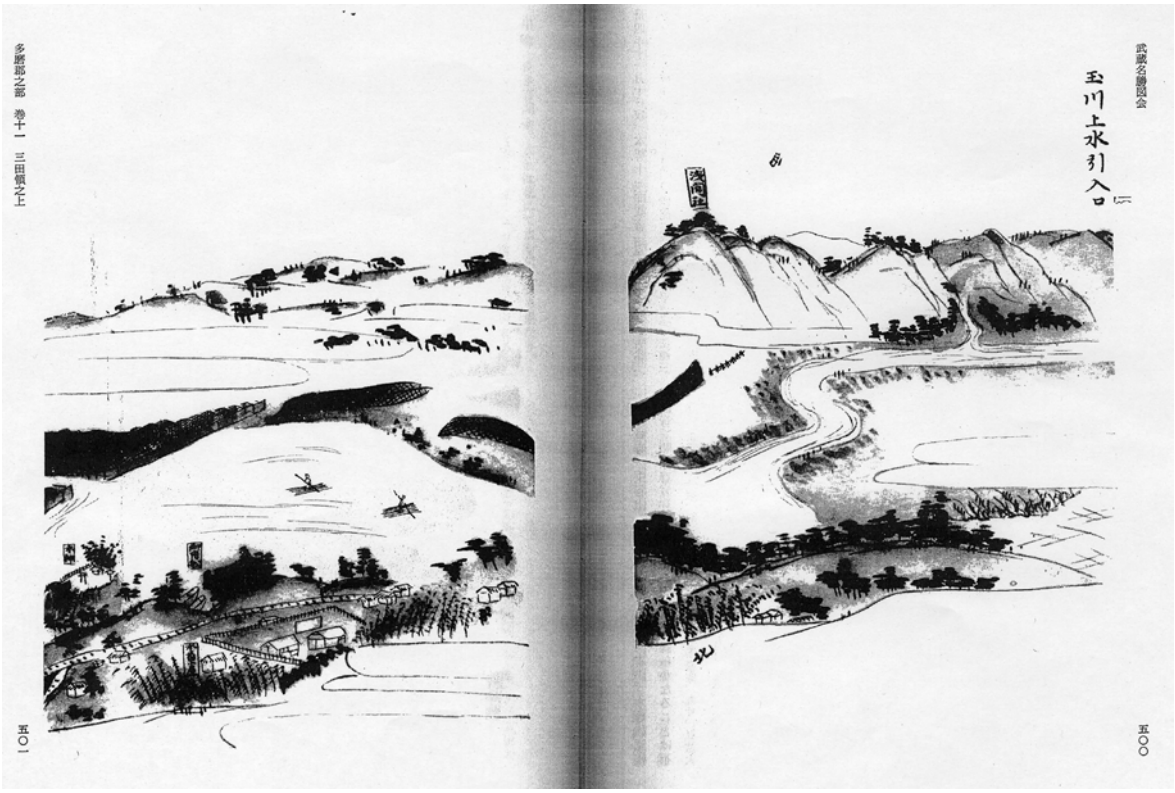


図 56　『武蔵名勝図会』中「玉川上水引入口」

以上、多摩川の名所景観を描いた 36 点の絵の視点場と構図を場所ごとに把握した。

絵に描かれる富士山の方角や川の蛇行のようすなど、多摩川の流路が若干変化しているとしても、実際の風景に忠実に描かれていることが把握された。

（３）視点場及び眺望方向による構図の違いと構成要素

多摩川の名所絵の視点場と眺望方向から、①川岸から対岸を眺める景、②船上など川の上から対岸や流軸方向を眺める景、③多摩川を望む高台から多摩川を俯瞰する景、の３つの構図があることが把握された。この３つの構図は土木学会編『水辺の景観設計』[26] で「河川景観の眺めのタイプ」の３種類と同じ考え方である。

また萩島[27] は浮世絵風景画とヨーロッパ風景画の構図を分析し、正面景（視対象を川の流れに対し直角に見る景観）、軸景（流軸方向にパースペクティブに見る景観）、俯瞰景（高い視点場からの景観）の３つに類型化しているが、本研究でも、対岸景、流軸景、俯瞰景の３つの構図で類型化をすることは妥当と思われる。

構図の違いによって、名所景観の構成要素がどう違うか分析した。

１）対岸景

最もよくみられる構図が、この対岸景であった。

手前から此岸、多摩川、対岸、山並み、という構成要素でできている点が共通である。川を画面に斜めに配置するか、水平方向とするか、といった違いはあるが、基本は此岸、多摩川、対岸、山並み、といった具合に層状に構成される。ただ層状に平行な画面構成ではしまりがないため、此岸に人や船などを配して対角線にアイストップとなる富士や大山、月などを配置するなどの工夫がみられる。対岸景は多摩川沿いであればどこでも得られる景ではあるが、特に六郷渡、登戸周辺、日野周辺が多く描かれているのは、交通の要所でもあるが、多摩川がちょうど蛇行して広い州浜をつくり、多摩川の景観の雄大さがよく顕れている場所だからではないだろうか。支流との合流点である牛浜も広い州浜を持ち、周囲にめぼしい観光要素がないにもかかわらず、挿絵つきで紹介されている。

また、左岸から右岸を眺めた景のほうが圧倒的に多く描かれているのは、アイストップとなる大山や富士山が望めるからと考えられる。

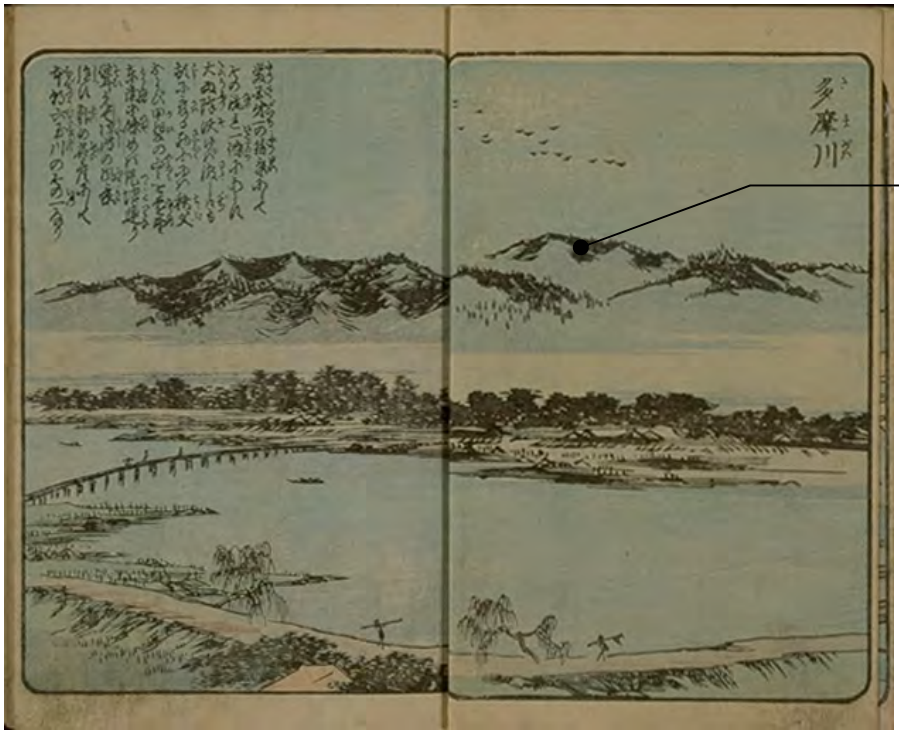


図 57　対岸景の具体例１（『絵本江戸土産』中「多摩川」）

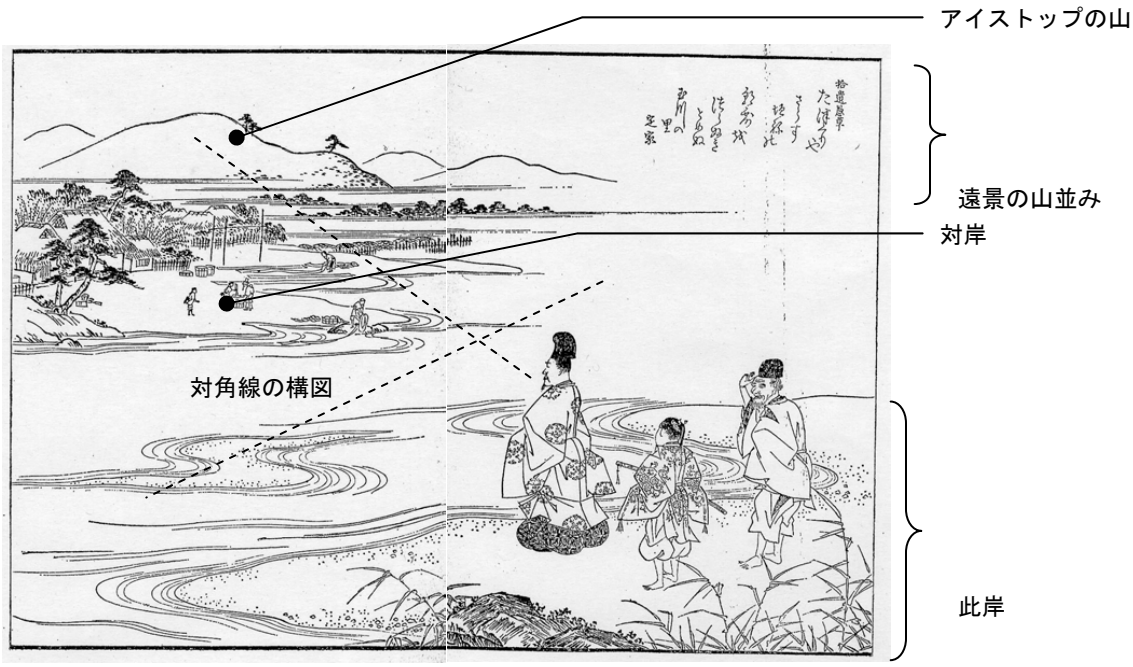


図 58　対岸景の具体例２（『江戸名所図会』中「拾遺愚草」）

２）流軸景

川を中心にパースペクティブに描く構図で、構成要素は、川にかかる橋や船が点々と奥行きを見せ、アイストップには富士や遠景の山並みが見え、川は蛇行させて両岸の緑が交互に張り出して自然な奥行き感を出している。

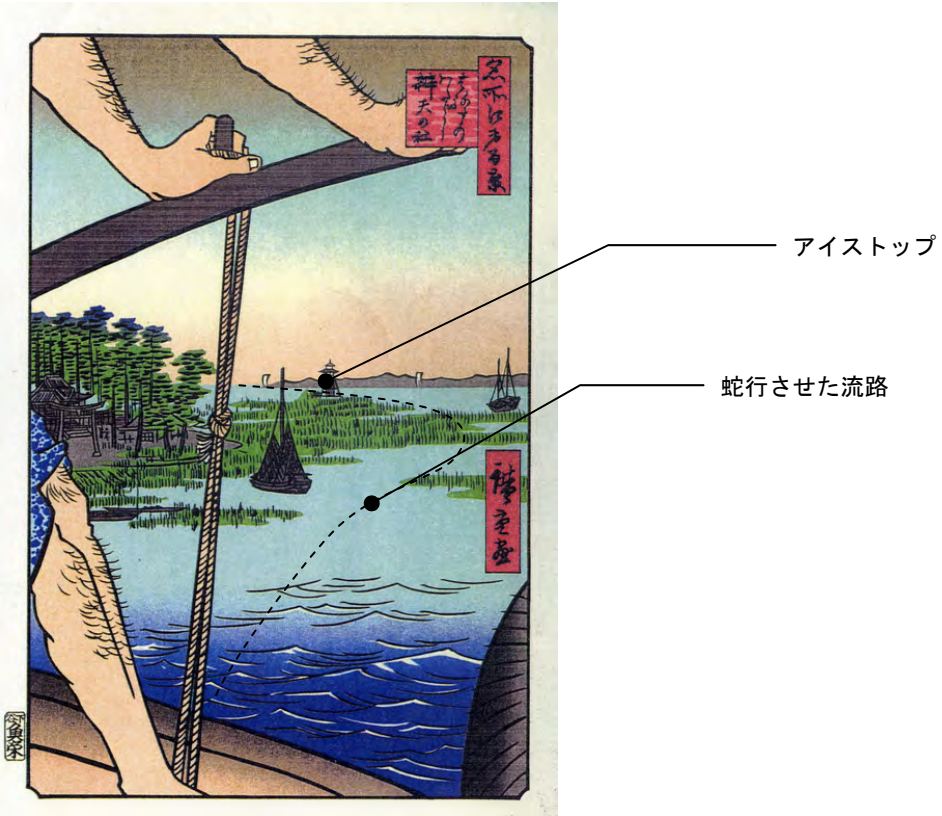


図 59　流軸景の具体例１（歌川広重「名所江戸百景　はねたのわたし弁天の社」）

図 60　流軸景の具体例２（歌川広重「東海道五十三次之内　川崎」）

３）俯瞰景

多摩川沿いは多摩川が切り開いた段丘が両岸に迫っており、多摩川を俯瞰するよい視点場が点在する。図 54 を見てもよくわかるように、俯瞰景の視点場は崖線上に位置する。

その構成要素はただ見下ろすのみでなく、どこから見下ろしているのか視点場が描かれている。多摩川両岸の平坦地の広がり、蛇行して流れる多摩川のようす、遠景の山々が描かれる。

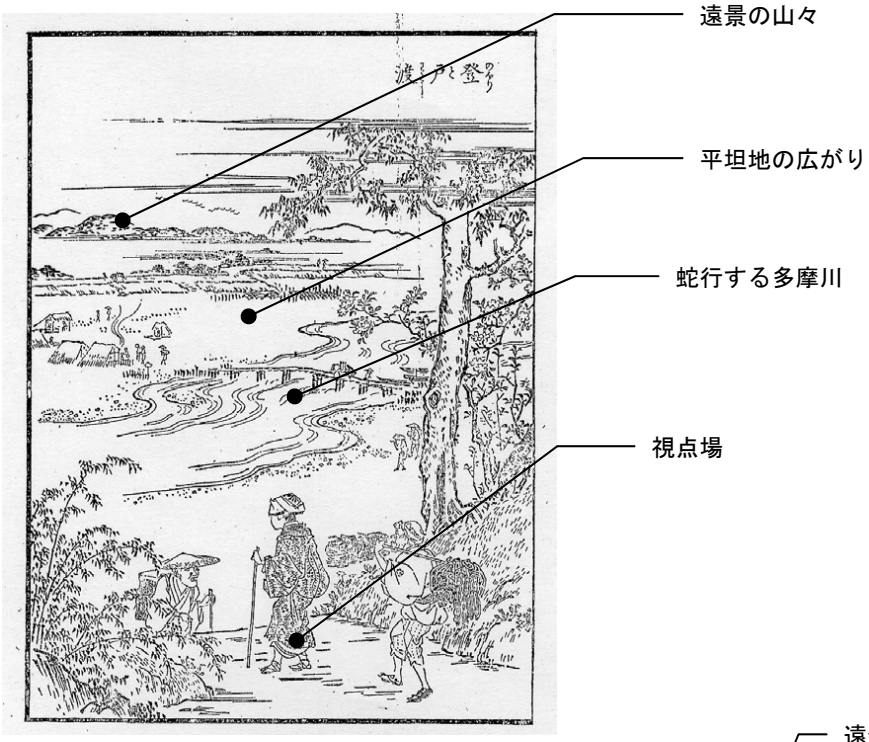


図 61　俯瞰景の具体例１（『江戸名所図会』中「登戸渡」）

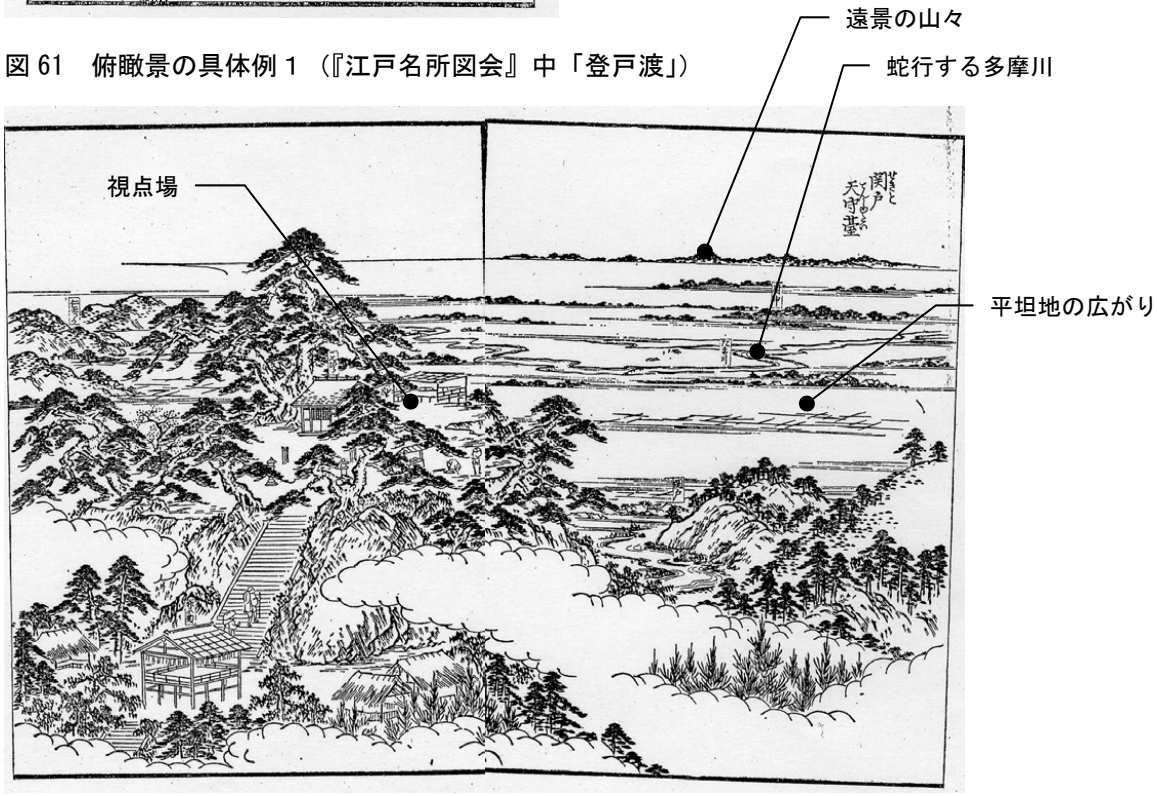


図 62　俯瞰景の具体例２（『江戸名所図会』中「関戸天主台」）

（４）名所景観の視点場及び眺望の現状

名所絵等から把握された多摩川の名所景観が、現在どのようになっているか、視点場と眺望について現地調査を行った。

１）羽田弁天社周辺

現在弁天社は多摩川沿いから内陸に入り、眺望方向には水難事故者慰霊碑が建っている。弁天社のこんもりとした森はなく、護岸はコンクリートで固められている。大きく構図が変わった感はない。これは、名所絵と同様アイストップが存在することや海が遠望されること、なによりも両岸に高い建物がなく、空の広がりが感じられるせいではないだろうか。

図 63　現在の羽田弁天社周辺の眺め（2008 年 3 月撮影）

２）六郷土手周辺

現在の六郷土手から富士山を望む方向に撮った写真が図 64 である。

対岸に雑然と高層建築物が建ちならび、アイストップとなるようなものが見当たらない。景観の構成要素として、此岸、川、対岸の平坦地、遠景、といった層ができるはずであるが、河川敷は広く運動施設となっているが、川辺が草藪となっていて土手から多摩川の水面がまったく見えない。六郷橋脇の六郷土手は多摩川が蛇行して岬状となっているため、富士山を眺めやすい地点にもかかわらず、川の水面が見えず、幹線道路のため建築物の高層化も激しい。名所景観の面影は望めない。

図 64　現在の六郷土手からの眺め（2008 年 3 月撮影）

３）多摩川台公園

丸子橋周辺の多摩川を見下ろせる視点場である。

多摩川を見下ろせるよい眺望地点であり、現在の多摩川八景にも選ばれている（図 65）。

しかし多摩川沿いに細長く広がっている公園にもかかわらず、樹木等が茂りすぎており、十分な視野が確保できる場所が少ない。名所絵にあるような中原街道を見下ろした景観は、中原街道沿いに高層建築物が建ちならび、多摩川らしい名所景観とはいえなくなっている（図 66）。

図 65　現在の多摩川台公園からの眺め１（2008 年４月撮影）
多摩川八景にも選ばれた視点場

図 66　現在の多摩川台公園からの眺め２（2008 年４月撮影）
中原街道沿いの高層建築物が見える

４）登戸周辺

登戸周辺の河川敷からは向丘の丘陵が見え（図 67）、晴れた日には富士山が望める。此岸、川、対岸、遠景の丘陵、という構成要素は満たされた景観といえる。ただ、近年高層建築物が多く建ちならび、丘陵のつらなりが建築物に分断され、雑然とした景観となっている。

図 67　現在の登戸周辺の眺め（2006 年９月撮影）

５）調布周辺

図 68 は調布市多摩川児童公園から対岸を眺めたものである。広い河川敷の広がりや川の流れ、対岸の緑、遠くに連なる丘陵と、構成要素がよく保たれた景観といえる。鉄塔や対岸の雑多な建築物が気になる。垂直な煙突や鉄塔は、景観にそぐわない印象を与える。

図 68　現在の調布周辺の眺め（2006 年 11 月撮影）

６）関戸天主台周辺

関戸の天主台は、現在案内書きが残っているのみで、眺望できるような環境整備はされていない。天主台跡から近い場所から多摩川が見通せる場所から見下ろした写真が図 69 である。

遠くに対岸の丘陵が見え、平坦地の広がりもある程度把握されるが、多摩川に並行して走る川崎街道沿いに高層建築物が建ちならび、多摩川の流れはほとんど見えない。

図 69　現在の天主台周辺からの眺め（2008 年 4 月撮影）

７）日野周辺

立日橋周辺から富士山方向を眺めた写真が図 70・図 71 である。

此岸、川、対岸、丘陵が見え、天気がよい日には富士山や丹沢大山がよく見えるそうである。ただ、付近には高層マンション等も建ち、景観上問題と思われる。

図 70　現在の立日橋周辺の眺め１（2008 年 4 月撮影）

図 71　現在の立日橋周辺の眺め２（2008 年 4 月撮影）

８）普済寺

残念ながら普済寺から多摩川を眺めることはできない（図 72)。残堀川からの見上げでも（図 73)、普済寺を眺めることはできず、名所絵に残っているような景観は楽しめない。普済寺から多摩川までの 500m足らずの距離に、高層建築物が建ちならび、開放感のある眺望は得られない。

図 72　現在の普済寺からの眺め（2008 年 4 月撮影）

図 73　残堀川から普済寺を見上げた眺め（2008 年 4 月撮影）

９）牛浜

図 74 は、多摩橋上から多摩川の下流側を見下ろした景である。

多摩川の広い州浜が広がり、両岸に緑が茂り、遠方には丘陵が見える。色や形が雑然とした建築物や煙突、鉄塔などがなければさらによい景観といえよう。

図 74　現在の多摩橋からの眺め（2008 年 4 月撮影）

10）羽村堰

図 75 は羽村堰を右岸側から眺めたもので、ほぼ武蔵名勝図会と同様の構図となっている。

多摩川上流の蛇行した流れが右手に見え、羽村堰の手前で川幅がふくらんでいる。正面の赤い斜面が見える山が浅間社（羽村神社）のある山である。

図 75　現在の羽村堰周辺の眺め（2008 年 4 月撮影）

４－３　考察

多摩川を描いた名所絵等の分析調査では、以下のことが明らかとなった。

- 江戸から明治初期にかけて描かれた名所図会の挿絵や浮世絵のうち、多摩川を描いたものは全部で 41 点見つけられ、描かれた場所と視点場・眺望方向が特定できたものは 36 点であった。この 36 点から名所絵等が実際の風景に忠実に描かれていることがわかった。
- 収集した 36 点の絵について、対岸景、流軸景、俯瞰景の３つの構図に分類しその構成要素を分析したところ、対岸景では、此岸、川、対岸の平坦地、遠景の山々が層状に構成され、アイストップとして特徴的な山が描かれること、流軸景では、画面中心にパースペクティブな多摩川の流れを据え、川にかかる橋や船、アイストップに山、川は蛇行させて両岸の緑が交互に張り出すように描かれること、俯瞰景では、視点場が必ず描かれ、多摩川両岸の平坦地の広がり、蛇行して流れる多摩川のようす、遠景の山々が描かれることがわかった。
- さらに、名所絵と同様の視点場からどのように見えるか、構図と構成要素の変化に着目して現地調査を行ったところ、対岸景では広い河川敷はそのままであっても、対岸に高層建築物が建ち、背景となる山並みが分断され、アイストップとなる富士・大山などが見えなくなってしまっていたり、俯瞰景では視点場となる場所が眺望のできる状態になく、また視点場と多摩川との間に高層建築物が建ち、多摩川の眺望を遮ってしまっているなど、多摩川の名所景観が失われているところが多かった。

多摩川の景観イメージのアンケート調査で、「開放感」が重要な評価指標であることが把握されたが、名所絵等でも多摩川が蛇行して河川敷が広くなっている六郷渡、登戸、日野や、支流との合流点である牛浜が描かれているのは、特に開放感を感じられる場所だからではないだろうか。

また、崖線上から俯瞰する名所景観も多摩川らしい景観といえる。萩島の「水面と同じ高さの位置から河川を見れば、視野に入る水の面積は小さく、河川景観の迫力に乏しい。（略）視野の中に広大な水面を捉えようとすれば、高い位置から水面を見る必要がある。海・湖・大河川の場合は、どうしても俯瞰してその全容を眺めようとする。河川を見渡せる視点場が必要である。」[00)] という意見はもっともで、緩やかに蛇行する多摩川の雄大さを見ることができるのは崖線からの俯瞰景ならではである。現在、このような俯瞰景の視点場となる場所が眺望のきかない場所となってしまっているのは、多摩川の景観にとって大きな損失である。多摩川の景観を保全するためには、これらの崖線上の高台の視点場を整備し、その眺望を遮るような建築物の規制をかけていくなどの方策が必要と考えられる。

今回多摩川を描いた名所絵等は 41 点見受けられたが、多摩川には行善寺八景や玉川獺田占勝亭八景、枡形山からの三十三景など、他にも著名な視点場があることがわかっている。今後はそういった視点場からの景観についても調査を行い、多摩川の景観保全の指針へと生かされることが望ましい。

5　総合考察

本研究ではまず、多摩川沿いの建築高の実態を把握するため、多摩川沿いを 500m×100mのメッシュに分割して行った建築物の平均階数調査では、上流では左岸 2.43 階、右岸 2.21 階、中流では左岸 2.61 階、右岸 2.86 階、下流では左岸 3.27 階、右岸 2.84 階であり、上流から下流に向かって高い建築物が多くなっている現状を把握した。多摩川は古くから交通の要所であったことから、多摩川沿いには多くの幹線道路が走り、局所的に平均 4 階以上の場所が見受けられ、平均階数が 18.8 階というメッシュもあった。

多摩川により近い（堤防から 500m 以内）方が川から離れた場所よりも平均階数が高い場合が、多摩川沿い全体で約 20%あり、とくに左岸下流の多摩川大橋から丸子橋にかけて著しいことがわかった。川に近い範囲のメッシュの平均階数が高いと、その向かい側の平均階数は高くないという傾向があり、多摩川の眺望が建築物の高層化の誘因となっている可能性が示唆された。

次に、市民が多摩川にどのような景観イメージを抱いているかアンケート調査を行ったところ、人々は多摩川に対し「開放感がある」ことを最も重要視しており、自然豊かで山並みのスカイラインが整った景観をよい景観として評価していることがわかった。

さらに江戸から明治初期の名所図会の挿絵や浮世絵の中から多摩川を描いたものについて調べたところ、全部で 41 点の多摩川の絵が見つけられ、うち実際の場所が判明した 36 点の絵から、多摩川の名所景観の場所と構図、構成要素について分析し、多摩川の名所絵が実際の風景に忠実であることがわかった。また、名所絵等の構図には対岸景、流軸景、俯瞰景の、３つの構図があることが把握され、対岸景では、此岸、川、対岸の平坦地、遠景の山々が層状に構成され、アイストップとして特徴的な山が描かれること、流軸景では、画面中心にパースペクティブな多摩川の流れを据え、川にかかる橋や船、アイストップに山、川は蛇行させて両岸の緑が交互に張り出すように描かれること、俯瞰景では、視点場が必ず描かれ、多摩川両岸の平坦地の広がり、蛇行して流れる多摩川のようす、遠景の山々が描かれることがわかった。

「多摩川らしい」景観の重要な指標は、開放・オープンスペース性、自然性であることは、市民に対するアンケートの結果で立証されたが、名所景観でも多摩川が蛇行する六郷渡、登戸、日野や、支流との合流点である牛浜が描かれているのは、多摩川でも開放・オープンスペース性の高い場所であることも関係しているのではないか。

また、崖線上から俯瞰する名所景観も多摩川らしい景観といえる。萩島の「水面と同じ高さの位置から河川を見れば、視野に入る水の面積は小さく、河川景観の迫力に乏しい。（略）視野の中に広大な水面を捉えようとすれば、高い位置から水面を見る必要がある。海・湖・大河川の場合は、どうしても俯瞰してその全容を眺めようとする。河川を見渡せる視点場が必要である。」[28)] という意見はもっともである。多摩川沿いの崖線上の視点場から緩やかに蛇行する多摩川と遠景の山々、という組合せは多摩川らしい景観といえよう。

名所景観の現状では、多摩川らしい広い河川敷は現在もそのままではあるが、対岸に高層建築物が建ち、背景となる山並みが分断され、アイストップとなる富士・大山などが見えなくなってしまい、多摩川らしい名所景観は失われつつある。特に俯瞰景では、視点場となる場所が眺望のための整備をされておらず、また崖線上の視点場と多摩川との間に高層建築物が建ち、多摩川の眺望を遮ってしまっている。多摩川の景観を保全するためには、これらの崖線上の高台の視点場

を整備し、その眺望を遮るような建築物の規制をかけていくなどの方策が必要と考えられる。

今回多摩川を描いた名所絵等は 41 点見受けられたが、多摩川には行善寺八景や玉川獺田占勝亭八景、枡形山からの三十三景など、他にも著名な視点場があることがわかっている。今後はそういった視点場からの景観についても調査を行い、多摩川の景観保全の指針へと生かされることが望ましい。

文　献

1）進士五十八：1987、都市の河川座標軸、『緑のまちづくり学』、学芸出版社、p.154-165

2）関・深海：1998、東京 23 区における建物高さに関する研究、東工大・社工論文梗概集 29、pp.126-129

3）新多摩川誌編集委員会：2001、新多摩川誌本編中巻、財団法人河川環境管理財団、p.1130

4）国会図書館貴重書画像データベースシステム http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_ni_koma.jsp;jsessionid=823AB870A654D3A00A83AF4737544BB6

5）http://ginjo.fc2web.com/137kumokago/kumokago.htm

6）http://ginjo.fc2web.com/137kumokago/kumokago.htm

7）朝倉治彦編：1979、日本名所風俗図会３、角川書店

8）片山迪夫校訂：1967、武蔵名勝図会、慶友社

9）国会図書館貴重書画像データベースシステム http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_ni_koma.jsp;jsessionid=A1CE819197F58E29DA83099E011A03BC

10）国会図書館貴重書画像データベースシステム http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_ni_koma.jsp;jsessionid=A1CE819197F58E29DA83099E011A03BC

11）1975：浮世絵大系 13 富嶽三十六景、集英社

12）国会図書館貴重書画像データベースシステム http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_ni_koma.jsp;jsessionid=823AB870A654D3A00A83AF4737544BB6

13）鈴木棠三・朝倉治彦校註：1975、新版江戸名所図会、角川書店（全三巻）

14）国会図書館貴重書画像データベースシステム http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_ni_koma.jsp;jsessionid=CE5F9DF308CA6476ED364CA1EDE672B1

15）http://ginjo.fc2web.com/137kumokago/kumokago.htm

16）今尾恵介編：2001、多摩川絵図今昔、けやき出版

17）http://ginjo.fc2web.com/137kumokago/kumokago.htm

18）http://ginjo.fc2web.com/137kumokago/kumokago.htm

19）朝倉治彦編：1979、日本名所風俗図会３、角川書店

20）1976：浮世絵大系 17 名所江戸百景 2、集英社

21）国会図書館貴重書画像データベースシステム http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_ni_koma.jsp;jsessionid=823AB870A654D3A00A83AF4737544BB6

22）国会図書館貴重書画像データベースシステム http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_ni_koma.jsp;jsessionid=823AB870A654D3A00A83AF4737544BB6

23）http://ginjo.fc2web.com/137kumokago/kumokago.htm

24）http://ginjo.fc2web.com/137kumokago/kumokago.htm

25）江戸東京博物館収蔵品検索 http://digitalmuseum.rekibun.or.jp/app/collection/detail?id=0195202802&sk=%8F%AC%97%D1%90%B4%90%65

26）土木学会編：1988、水辺の景観設計、技報堂出版、p.3

27）萩島哲：1996、風景画と都市景観、理工図書、p.107

28）萩島哲：1996、風景画と都市景観、理工図書、p.101

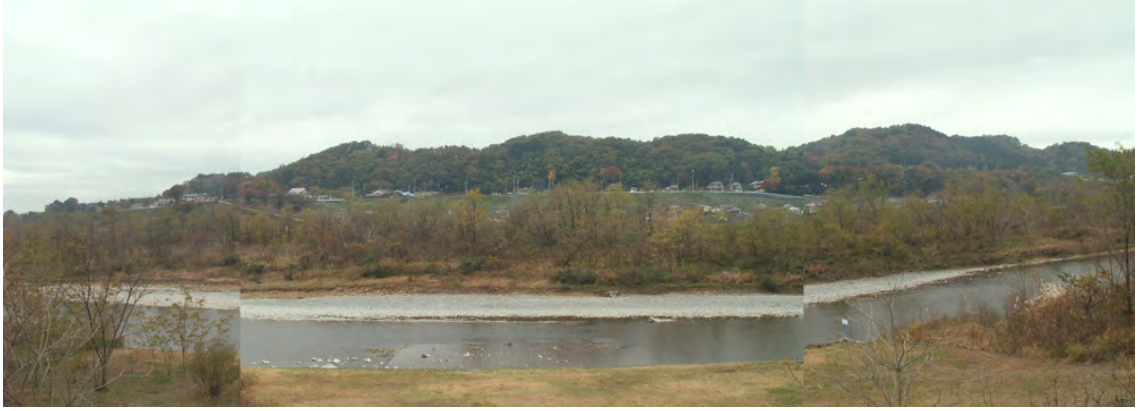
資　　料

調査対象地域を羽村堰から多摩川基点まで500mごとに撮影した。(2006年11月～2月撮影)

１　左岸から右岸側を撮影

あきる野市草花

あきる野市草花



あきる野市草花

あきる野市草花

あきる野市草花

あきる野市草花

あきる野市平沢

あきる野市平沢

あきる野市二宮

あきる野市小川東

あきる野市小川東

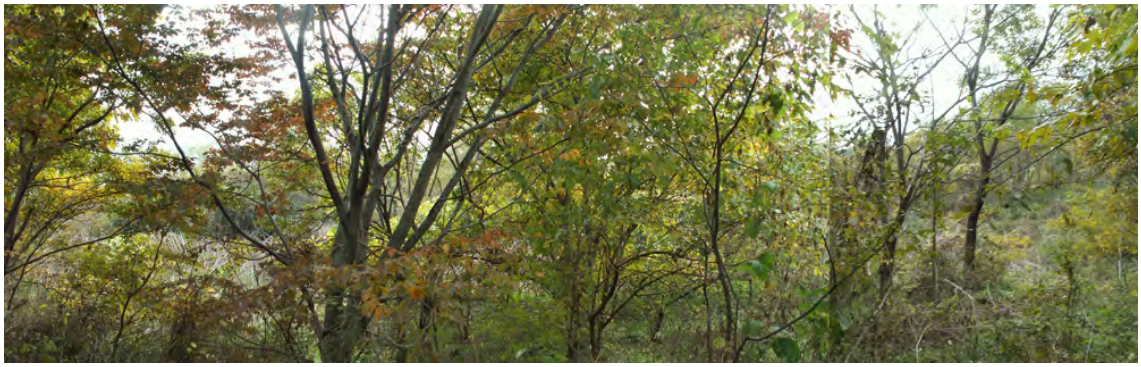
八王子市高月町

八王子市高月町

八王子市高月町

八王子市高月町

八王子市滝山町



八王子市滝山町

八王子市丸山町

八王子市平町

八王子市平町

八王子市小宮町

八王子市小宮町

八王子市小宮町

日野市大字日野

日野市栄町

日野市栄町

日野市栄町

日野市日野本町

日野市大字日野

日野市大字日野

日野市大字石田

日野市大字石田

日野市大字石田

日野市大字石田

日野市大字新井

日野市百草

多摩市一ノ宮

多摩市一ノ宮

多摩市関戸

多摩市関戸

多摩市関戸

多摩市連光寺

多摩市連光寺

稲城市大丸

稲城市大丸

稲城市大丸

稲城市大丸

稲城市大丸

稲城市東長沼

稲城市押立

稲城市押立

稲城市押立

稲城市押立

稲城市矢野口

川崎市多摩区菅野戸呂

川崎市多摩区菅稲田堤

川崎市多摩区菅稲田堤

川崎市多摩区布田

川崎市多摩区布田

川崎市多摩区中野島

川崎市多摩区中野島

川崎市多摩区和泉

川崎市多摩区登戸

川崎市多摩区登戸

川崎市多摩区宿河原

川崎市多摩区宿河原

川崎市多摩区宿河原

川崎市多摩区堰

川崎市多摩区堰

川崎市高津区久地

川崎市高津区久地

川崎市高津区溝口

川崎市高津区二子

川崎市高津区二子

川崎市高津区諏訪

川崎市高津区北見方

川崎市高津区下野毛

川崎市高津区下野毛

川崎市中原区宮内

川崎市中原区等々力

川崎市中原区等々力

川崎市中原区等々力

川崎市中原区丸子通

川崎市中原区上丸子

川崎市中原区上丸子

川崎市中原区下沼部

川崎市中原区中丸子

川崎市中原区中丸子

川崎市中原区上平間

幸区古市場

幸区古市場

幸区古市場

幸区小向

幸区小向

幸区河原町

幸区幸町

川崎区本町

川崎区旭町

川崎区港町

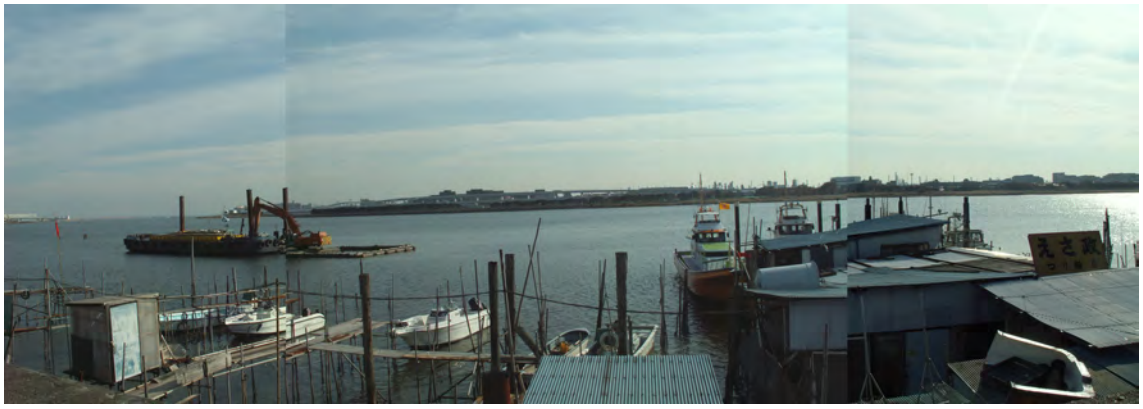
川崎区鈴木町

川崎区中瀬

川崎区中瀬

川崎区大師河原

川崎区殿町



川崎区殿町

２　右岸から左岸側を撮影

羽村市羽中

羽村市羽東

羽村市羽東

羽村市玉川

福生市大字福生

福生市大字福生

昭島市田中町

昭島市大神町

昭島市宮沢町

昭島市中神町

昭島市福島町

昭島市福島町

昭島市富士見町

昭島市富士見町

立川市柴崎町

立川市柴崎町

立川市柴崎町

立川市錦町

国立市石田

国立市谷保

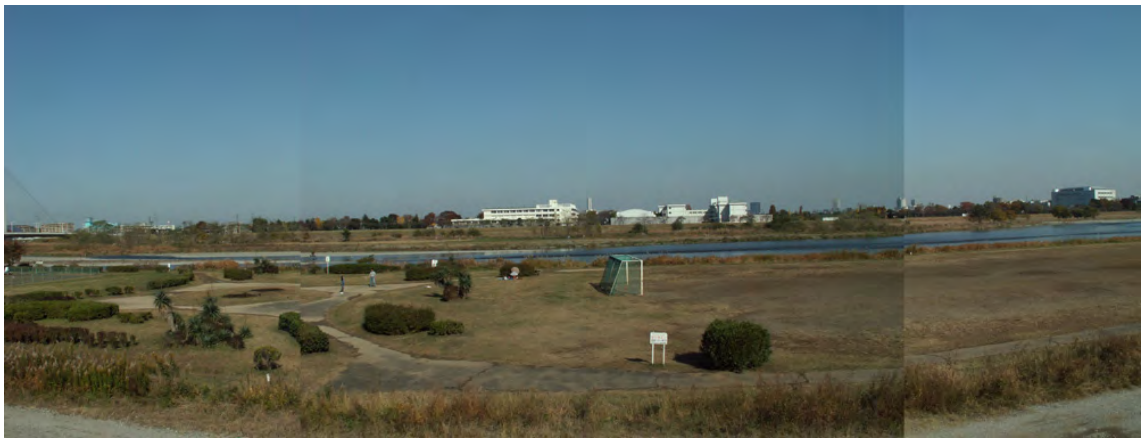
国立市谷保

府中市四谷

府中市四谷

府中市四谷

府中市四谷



府中市四谷

府中市四谷

府中市住吉町

府中市住吉町

府中市南町

府中市南町

府中市是政

府中市是政

府中市是政

府中市是政

府中市小柳町

府中市小柳町

府中市小柳町

府中市押立町

調布市上石原

調布市下石原

調布市多摩川

調布市多摩川

調布市多摩川

調布市多摩川

調布市多摩川

調布市染地

狛江市西和泉

狛江市中和泉

狛江市元和泉

狛江市元和泉

狛江市東和泉

狛江市猪方

狛江市駒井町

狛江市駒井町

世田谷区喜多見

世田谷区喜多見

世田谷区宇奈根

世田谷区鎌田

世田谷区鎌田

世田谷区玉川

世田谷区玉川

世田谷区玉川

世田谷区野毛

世田谷区野毛

世田谷区野毛

世田谷区玉堤

大田区田園調布

大田区田園調布

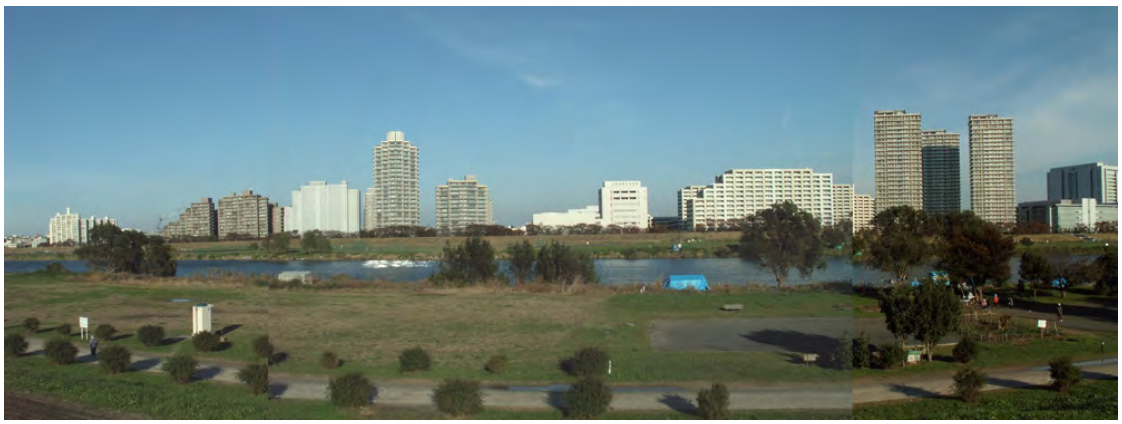
大田区田園調布

大田区田園調布

大田区田園調布

大田区田園調布

大田区鵜の木



大田区下丸子

大田区下丸子

大田区下丸子

大田区下丸子

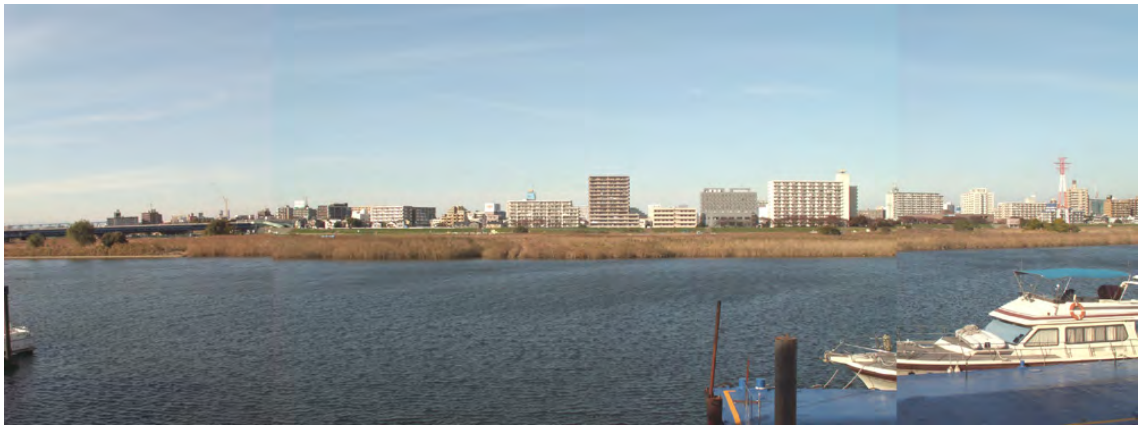
大田区矢口

大田区矢口

大田区多摩川

大田区西六郷

大田区西六郷



大田区東六郷

大田区南六郷

大田区南六郷

大田区本羽田

大田区羽田

大田区羽田

大田区羽田

「多摩川沿川地域におけるオープンスペースと建築景観の実態に関する調査研究」

—特に建築物による眺望遮蔽の現状と河川の景観資源価値への影響や住民意識について—

（研究助成・学術研究 VOL.37-NO.273）

著　者　進士　五十八

発行日　2009 年 3 月 31 日
発行者　財団法人　とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002
東京都渋谷区渋谷１－１６－１４（渋谷地下鉄ビル内）
ＴＥＬ（０３）３４００－９１４２
ＦＡＸ（０３）３４００－９１４１

共同研究者：栗原裕也（東京農業大学大学院　造園学専攻）・青木いずみ、麻生恵、栗田和弥（東京農業大学　地域環境科学部造園科学科）・神藤正人（東京農業大学　短期大学部環境緑地学科）